## 佐賀県立九州陶磁文化館

# 研 究 紀 要

第 8 号

オリバー・スミスコレクションの日本陶磁器の特徴
・・・・・・・大橋 康二
肥前小城松香渓焼の基礎的研究
・・・・・・・ 徳永 貞紹
柴田夫妻コレクションにみる銘款集成3 一 元禄様式の時代 一

2023 佐賀県立九州陶磁文化館

## はじめに

このたび佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第8号を刊行しました。

当館は、昭和55年(1980年)に九州陶磁に関する文化遺産の保存と陶芸文化の発展に 寄与する目的で設立され、以来、多面的な活動を行ってきましたが、重要な活動の一つと して調査研究にも力を尽くし、研究紀要や展覧会図録等でその成果を公にしてきました。

当館における調査研究活動をより充実させ、今後の展示及び教育普及に活用するため、研究紀要の刊行を進めており、第8号では、ノルウェーのオリバー・スミスコレクションにみるアンティークとしての肥前陶磁の姿を研究した論考や、小城鍋島家が関与したと言われる松香渓焼の基礎的な研究、柴田夫妻コレクションの銘の紹介といった調査研究の成果を収録しました。

今後も、当館の設立目的にありますように、九州の陶芸文化の発展に寄与するべく九州 陶磁に関する調査研究に尽力し、その成果を逐次報告したいと存じますので、皆様方の御 叱正、御指導をお願い申し上げます。

令和5年(2023年)3月

佐賀県立九州陶磁文化館 館長 鈴田 由紀夫

## 目 次

はじめに

論考

オリバー・スミスコレクションの日本陶磁器の特徴

・・・・・・・ 大橋 康二 ・・・・ 1~30頁

肥前小城松香渓焼の基礎的研究

・・・・・・・ 徳永 貞紹 ・・・・31 ~ 60 頁

柴田夫妻コレクションにみる銘款集成3 一元禄様式の時代 一

・・・・・・・ 宮木 貴史・・・・61~83頁

### オリバー・スミスコレクションの日本陶磁器の特徴

大橋 康二

#### はじめに

オリバー・スミス (Oliver Smith 1843-1888) は日本が開国した明治初期の 1880 年代初め頃に水 先案内人 (ship's pilot) として日本の神戸に来たノルウェー人である。神戸滞在中に日本の美術工芸品を収集したと考えられる。彼は晩年、日本に滞在し、1888 年日本で収集したものを母国に寄贈した。現在、オスロ大学文化歴史博物館 (Museum of Cultural History, University of Oslo) に所蔵されている。この日本で収集したものの中に、陶磁器が少なくない。オリバー・スミスコレクション (以下、O. スミスコレクションと略す) の陶磁器はセットのものがあるので、総数は 212 点である。これについて、アン・ハブ (Anne Håbu) 氏が「Arts of Asia」で紹介した (Habu 2019)。その後、ルイーズ・コート (Louise Cort) 氏を通じて陶器は唐津焼ではないかと筆者に意見を求められ、一部の写真を拝見した。ところが窯の発掘品のようなものが多く、かなり特殊なものであるから実見する必要があるとコート氏にこたえた。それでコート氏が一緒に行く機会を探っていたところ、2019 年 9 月のドレスデン第 3 回調査のことについて櫻庭美咲氏と調整した時に、ドレスデンの後に行くことが可能であると櫻庭氏から聞き、具体化したのである。2019 年 9 月にルイーズ・コート氏と一緒にアン・ハブ氏対応によりオスロ大学文化歴史博物館で O. スミスコレクションの陶磁器を調査した。

そのうち、中国磁器 8 点を除くと、残りすべてが日本陶磁器である。日本陶磁器のうち 165 点が肥前陶磁 $^1$ であった。肥前陶磁器のうち、肥前陶器は 75 点、肥前磁器は 90 点である。オリバー・スミスがこれらを 1880 年代に神戸で収集したとされるので、肥前陶磁器にどのような特徴があるかをみてみよう。収集した 1880 年代に近い 19 世紀からはるかに時間的に離れたものとして、 $1590 \sim 1640$  年代の肥前陶器(唐津焼)が 27 点と多いのは興味深い。

#### 1. 佐賀地方の肥前陶器(1)< 17世紀初頃の窯跡掘り出し品>

江戸初期の肥前陶器のなかで製品として完成し伝世した可能性が高いものは図1 (UEM6765) の鉄絵小皿1点のみである。

他の 26 点は焼成時に歪んだり、欠損があるなどし、窯の捨て場に廃棄されたものを 19 世紀に掘って採取した陶器と推測される。しかも、その中に採掘した窯の場所を記した紙を貼り付けた例が 2 点あった(図 2 (UEM6727)・4 (UEM6728))。図 2 は「肥前国真手野掘り出さむ弐百八十年」とあり、図 4 は「肥前□□□□真手野村 弐百□年」と読める。オリバー・スミス

が神戸に来た 1880 年から 280 年前とすると、1600 年を示している。実際に、図 2 、 4 は 1590 ~ 1610 年代の肥前陶器の特徴をもつから、1880 年頃当時、これらを扱った人はこれらの窯跡の製作年代をおおむね理解していたといえる。

これを手掛かりに O. スミスコレクションの中の、窯跡の掘り出し品 24 点を調べると、全て、武雄市武内地区(別図  $1 \cdot 2$ )、つまり当時、杵島郡の「真手野村」と呼ばれた地域の窯の製品の特徴をもつことが明らかになった $^2$ 。

その主な陶器の種類を紹介する。

#### ① 皮鯨手

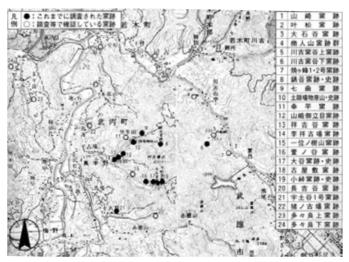
まずは、紙片が貼られていた図2・4の小皿は、灰釉が底部以外にかけられている。口端に鉄を塗ったもので、「皮鯨手」と呼ばれる。図4 (UEM6728) は見込に胎土目痕が4個みられる。図2 (UEM6727) のように内面に目痕がないものは、武内地区の古窯跡のうち、宇土谷窯(図3)(武雄市教委1995) のほか、李祥古場窯(武雄市教委1999)、七曲窯(武雄市教委1993)でみられる。底部には胎土目跡がみられるので、重ね積みの際、一番上にのせて窯詰めしたものである。図4のように内面に胎土目痕が4個残るものは、宇土谷窯、小峠窯(図5)(武雄市教委1992)でみられる。紙片貼付けはないが、同類品としてUEM6729(図6)がある。年代は1590~1610年代と推測される。

#### ② 鉄絵碗

第2に鉄絵碗がある(図7、UEM6759)。底部以外に灰釉を掛けた碗の外側面に抽象的な文様を筆で描く。類例は小峠窯(図8)でみられる。年代は1590~1610年代と推測される。図



別図 1 1590 ~ 1630 年代の肥前 陶器窯跡分布図(佐賀県のみ、網 掛け部分。山本文子氏作成)



別図2 武雄市武内地区の古窯分布図 (武雄市教育委員会『武雄市内古窯跡群発掘 調査報告書VII 萱ノ谷窯跡』2000より転載)

9、UEM6774 も鉄絵碗で類例は古屋敷窯(図10)出土品にみられる。

この時期に灰釉を掛けた陶器としては他に小坏がある(図 11、UEM6786)。底部は糸切放しの平底であり、底部以外に灰釉をかける。類例は七曲窯(図 12)でみられる。図 11 の小坏は口縁部に 1 か所、欠けがあり、それを漆で修理したとみられる。このコレクションの窯掘り出し品とみられるものに、図 13(UEM6761)は灰釉碗であり、焼成時に口の歪みがあるが、口の欠失部を赤漆で修理している。図 13 のように赤漆で口縁部を修理した例が計 5 例ほどみられる。明らかに呼継を施したものが 1 例(UEM6763)ある。これらは日本で修理が行われたと推測される。

#### ③ 鉄釉天目形碗

①、②と同時期のものとして、鉄釉をかけた天目形の碗(図 14、UEM6758)がある。天目は日本の鎌倉時代から 15 世紀にかけて中国から輸入され、濃茶を喫する代表的な茶碗として用いられ、この中国の天目を手本にして愛知県の瀬戸窯でも室町時代に多く作られた。17 世紀まで天目形碗に対する需要があったと思われ、新興の肥前陶器でも天目が作られた。武内地域の窯では七曲窯(図 16)、古屋敷窯(図 15、武雄市教委 1996)、山崎御立目窯、李祥古場窯などで多くみられ、肥前窯の中で天目をとりわけ多く作った地域といえる。図 14 は天目形の特徴の一つである口縁部を胴部から引き上げ口縁下で一度内方に折り、外へと湾曲させて作る。「すっぽん口」といい、中国の天目に由来する特徴である。もう一つの特徴は高台際を削る時に、高台と直角の平らな面を削り出すのである。武内地区の窯でみられる天目にはこの平坦面の幅に大小があり、ほとんど削り込みが認められないものもある。図 14 は高台際に小さく平坦面が削り込まれている。同様に小さな平坦面をもつものが古屋敷窯(図 15)でみられる。削り出し高台の形状は中国の典型的なものとは大分異なるといえる。こうして天目形に成形したものに、天目の特徴の一つである鉄釉を、外面下半を除き施す。中国の一般的な天目と違い、2度掛けもなく、釉層は薄い。

以上が武内地区の初期段階の窯で作られた陶器である。焼成時に、胎土目を製品間にはさんで重ね積するのが特徴の時代であり、1590~1610年代と推測される。肥前では1600年代から重ね積に砂目を用いるものが現れる。1600~1610年代は胎土目積から砂目積への移行期と考えられ、両方の窯詰め方法が併存している時期である。1610年代から1630年代には胎土目積はみられなくなり、砂目をはさんで重ね積することが普通になる。そして、この段階に磁器焼成が有田同様に、武内地区でも始まる。この砂目積による陶器の代表として、口縁部端を断面N字状に折り返し、「溝縁」と呼んでいる灰釉小皿が多く作られるが、O. スミスコレクションには1点だけみられる(図17、UEM6724)。見込の砂目の痕は3個である。宇土谷1号窯(図18、武雄市教委1995)では砂目の痕が4個の溝縁皿が多いが、3個の例もある。砂目痕は、

有田などでは白っぽい砂であるが、図 17 の砂目は茶色い砂である。宇土谷窯でも茶色い砂目なので、本例も武内地区の産と推測される。使用した痕跡がなく口縁内側に重ねた製品の熔着痕もあるため、窯跡からの掘り出し品の可能性が高い。

この砂目積がみられる段階(1600~1630年代)の窯跡採取品と推測されるものをあげる。

#### ④ 三島手

朝鮮で15~16世紀に行われていた白土を用いる装飾法が朝鮮陶工によって磁器技術と共に肥前にもたらされる(大橋2021)。白土を充填する象嵌装飾を日本では「三島手」と呼び、白土を刷毛で器面に塗る痕を文様としたものを「刷毛目」と呼ぶ。図19(UEM6772)は皿の見込に回転による沈線で円圏を施し、白土で埋め、円圏内にハンコで押した菊花文を白土で充填する。内側面は白土をつけた刷毛で中心から放射状に引くが単純な放射状でなく、捻花状に表す。その上から、全体に透明に近い白釉をかける。素地が暗灰色の土を用いるため、白い文様がくっきりと浮かび上がる。全体に施釉された小皿を重ね積する際に、茶色を帯びた砂目4個を内外底において一度に多くの同様の皿を窯詰め焼成した。類例は古屋敷窯(図20)で多くみられるので、図19も古屋敷窯の製品であると考えられる。

図 21 (UEM6752) は腰を折り、外反りに口縁へと引き上げた碗である。見込に図 19 同様の円圏を引き、その中に菊花文を象嵌で表す。内側面は図 19 と異なり、刷毛目を 2 方に横方向に近く引く。外側面にも刷毛目を×のように引くのを繰り返す。図 19 同様、全体に透明釉をかけ、高台のみ砂目 4 個を置き、重ね積の一番上に据えて焼いている。類例は図 19 に比べて多くないが、同じ古屋敷窯 (図 22) で破片がみられるので、これも古屋敷窯の製品と考えられる。

#### ⑤ 刷毛目

図 23 (UEM6773) は刷毛目だけで装飾した小皿。見込は周囲を沈線で引くが、古屋敷窯のように丁寧に象嵌は行っていない。白土をつけた刷毛で雑に塗り、内側面に刷毛で波状の文様を施す。透明に近い釉を内面から外面腰部まで掛け、外底部は無釉とする。この施釉の仕方は他の一般的な灰釉皿と同様である。窯詰めは内外面に図 19・21 の砂より白い砂目 4 個を置き、重ね積している。素地は古屋敷窯の三島手同様に暗灰色で白土がくっきりと見えるようにしている。類例は、外底部無釉である点などから、古屋敷窯のものとは異なり、小峠窯(図 24)で多く出土している。年代的にも古屋敷窯の図 19・21 より後出と推測され、図 19・21 は 1610 ~ 1620 年代と推測されるのに対し、図 23 は 1610 ~ 1630 年代と推測される。

以上が、新たに秀吉の朝鮮出兵後の1598年に連れ帰られた朝鮮陶工が磁器技術と共にもたらした、白土を用いた陶器装飾法や砂目の窯詰め法であり、武内地区(別図2)の窯で類例がみられる。O. スミスコレクションの中で、これ以後の肥前陶器としては、17世紀末~18世紀前半頃、嬉野市の内野山窯でだけみられる鉄釉の小坏1点(図25、UEM6710)がある(類例は

佐賀県教委 1996 の PL. 14-230/231)。これも窯跡採取品と推測される。

#### 2. 古唐津写しの陶器

1590~1610年代頃の肥前陶器 (古唐津)を見本にして作られた「写し」といえるものが O. スミスコレクションに 18 点みられるが、これらは明治初期の武内地区で作られた可能性が高い。武内地区の窯跡出土品に似た特徴をもっているため、武内地区でこうした優れた写しを作る技術があったことを示す。実際に、古唐津写しといえる鉄絵小坏と小皿を 2021年4月の現地調査で実見した<sup>3</sup>。このグループと次の創作を加えた陶器がコレクションでは 27 点みられるが、これらの底部にススと思われる黒色物が付着しているものが多い(図 26・27)。これをオスロの博物館(Calin Constatin Steindal 氏)で分析した結果、カーボンが検出されたのでススとみて間違いないと思われる。このように底部をススで汚し古く見せる方法は、日本の近現代のアンティークの世界で行われていることは知られている。「古色をつける」という。それが明治初期の 1880 年代までには行われていたことを示す例として重要である。ちなみに、先述の現地調査で実見した小皿も同様に黒色物で汚れていた。

もう一つは武内の古窯跡の出土品を参考にしながらも、より創作性が強い陶器である。多いのは、下半を球形にふくらませて作り、上半はロクロ痕を残しながら、口縁へとまっすぐ立ち上がる器形であり、O. スミスコレクションに9点みられる(図 28)。図 27、UEM6753 の碗は焼成が不十分だったため、釉薬が熔けていない。外面上部から内面に透明に近い灰釉をかけ、外面下半は鉄釉と思われる釉を掛け分けるが、熔けておらず、不透明で白みを帯びたところもある。このような鉄釉と灰釉を上下などに掛け分けるのは武内の七曲窯でみられ(図 29)、釉の使い方は逆に外面上半から内面に鉄釉をかけ、外面下半に灰釉を掛け分けている。器形が下半を球形に作る碗も七曲窯で出土している(図 30)。釉の掛け方だけではなく、図 29 の高台脇の削りの特徴を図 28 は模倣しているようにみえる。器形は少し異なるが、こうした釉の掛け分けは他の肥前では知らないから、武内の古窯の製品を知った陶工が例の少ない器形ながらも選んでこの器形を作り出したものと推測される。そして、この図 27 も底部はススと思われる黒色物がしっかりと付着している。同様の内外に釉を掛け分けた碗と、外面に 2 つの釉を掛け分けた碗が O. スミスコレクションには 5 点みられる。

#### 3. 佐賀地方の肥前陶器(2) < 17世紀後半~19世紀中葉の陶器>

#### ⑥ 玉子手陶器

図31 (UEM6750) は水指と思われるが、大振りの茶碗としての用途も考えられる。白褐色の 土でロクロ成形し、上半部に波打つように3段のくびれをつける。17世紀の肥前の茶碗にみ られるデザインであるが、それを大振りの碗に施したものであり、円形に引き上げた口を歪めて作るのも 17 世紀前半の茶碗にみられた特徴である。肥前の唐津藩では将軍家へ例年献上品として「茶碗」が重要であったが、いわゆる玉子手(たまごで)に通じる明るい土を用いた茶碗などが作られた。

呉須で釉下に文様を描いたものもあるが、18世紀の中で「三島手」と呼ばれる白土象嵌に よる装飾も行われる。

#### ⑦ 白土象嵌 (三島手) と呉須絵陶器

図 32 (UEM6712) と図 33 (UEM6713) は内側面の印花文に白土を象嵌し、図 32 は見込に呉須で「福」字を描き、図 33 は見込に「寿」字を描く。これらは図 31 より灰褐色の素地である。図 32 と同様の素地で呉須による花唐草文を施した蓋付鉢が図 34 (UEM6706-2) である。西洋陶器のチュリーンを模した形である。似通った陶器の蓋が長崎出島和蘭商館で出土している。18世紀後半頃と推測される(調査は長崎市教委 2002 の報告分であるが、類品は未報告である。筆者実見)伝世品は身が佐賀県立九州陶磁文化館所蔵冨岡常泰氏贈品(図 35)にみられる。図 36 (UEM6745) も呉須で根引松と宝珠文を描いた碗である。

#### ⑧ 黒象嵌 (三島手)

ふつう「献上唐津」と呼ばれてきた陶器であり、ハンコで押してくぼんだ所に呉須を施し黒く表現する。図38 (UEM6701) の大皿は見込に竹虎文を主題とし、図39 (UEM6700) は上段に葵と思われる文様を象嵌するが、図38の口縁部と図39の筒形瓶の下段は同様の雲鶴文を表す。唐津藩主は度々変わったが、江戸後期の小笠原氏が藩主時代(1817~1871年)の作品であろう。この2点は白さが強い素地土を用い「献上唐津」と呼ばれるグループと考えられるが、O.スミスコレクションには少し暗い土を用いた鉢がある(図37)。やはり雲鶴文を外側面に黒象嵌で表す。UEM6744の碗は印で陰刻しただけであり、白土や呉須で象嵌していない。おそらくは明治時代に入る年代が推測される。このように佐賀県関連の陶器は武雄市武内地区の窯跡採集資料と、それを手本とした陶器と共に、江戸時代後半期の洗練された高級陶器として唐津藩領内のいわゆる「献上唐津」レベルの陶器が多いことが特徴である。

#### 4. 佐賀地方の肥前磁器

次の佐賀県に関わる陶磁器としては「鍋島」がある。鍋島は江戸時代に日本の最高権力者であった徳川将軍家に献上する磁器として佐賀藩鍋島家が開発した。そのため経費は全て佐賀藩が負担し、1660年代以降は伊万里市大川内(別図1)に設けられた藩窯で作られ、一般流通はしなかった。明治4年(1871)に明治政府の廃藩置県で鍋島藩はなくなり、藩窯も終わる。鍋島は1650年代以降、将軍家の食器献上を主とし、大名・公家などへの贈答品として作ら

れたが、その中で、もっとも重要なのは、将軍家への例年献上であった。例年献上制度の中 で佐賀藩に課されたのは、毎年11月に将軍と後継者の2人にそれぞれ「鉢・大皿・中皿・小 皿・猪口」の5品であり、鉢は2個、他は同じ意匠の20個1セット、合計82個の鍋島を江 戸(現東京)に運び献上することであった。将軍の動静や意向によって品質やデザインの変 遷があり、最盛期といえるのは5代将軍綱吉時代の1690年代から8代将軍吉宗の倹約令が出 される 1720 年代までであった。O. スミスコレクションでこの最盛期と推測されるのは図 40 (UEM6309-1) の色絵猪口の素地(色絵を焼き付ける前の段階の未完成品)である。未完成品 で、佐賀に残っていたものと思われる。大川内鍋島藩窯出土品に類品が2点(図41)みられ る(鍋島藩窯研究会 2002 の図 595·825)。O. スミスコレクションの鍋島で多いのは「後期鍋島」 と呼んでいる 1774 年以降の特徴をもつ鍋島皿である。図 44 (UEM6327) は将軍家献上 5 品の 中の「鉢」に当たる。図 42 (UEM6324) の口径 20.5 cmの皿が同 5 品の中の「大皿」に当たる。 図 43 (UEM6309-2) は口径 11.5 cmであり、「小皿」に当たる。これらのすべてが裏文様として 牡丹唐草文を描く。この裏文様は将軍家献上品に用いられた裏文様であり、他の大名などへの 贈答品の裏文様が鍋島で最も多くみられる七宝結び文(図 45)であるが、O. スミスコレクショ ンにはみられない。鍋島は裏文様で将軍家献上か、他の大名への贈答用かなど、使用目的を区 別したと考えられる。毎年、将軍家(将軍と後継者の大納言)へ2人合計164個を献上するこ とが、鍋島焼製作の主目的であったが、将軍家献上の残り物という考え方で、幕府の要人 40 人くらいに3品位を贈答することも決められていた。この献上品と幕府要人への贈答品は裏文 様で区別されていたが、献上品は毎年11月に江戸に運ぶ約2000個の1割程度であったから、 裏文様が七宝結び文の贈答品の方が9割を占め、多く存在したため、早くから鍋島の特徴的製 品としては七宝結び文を外側面に描いたものが紹介されてきた。そして、実際に江戸の大名屋 敷跡などの発掘調査で出土する鍋島の多くが七宝結び文を裏文様に描く皿(図45)であった。 鍋島藩窯で製作する場合は、失敗も考えて多く作られた。そして、裏文様として牡丹唐草文を 描いた皿は将軍家への献上以外には、他への贈答などに用いることは許されなかったと推測さ れる。その結果、余分に作り、残ったものは佐賀藩内で用いることが多かったと思われ、江戸 城(東京都埋文センター 2009)で出土するほか、佐賀城(佐賀城本丸歴史館 2021)、大坂の佐 賀藩蔵屋敷跡(大阪文化財研究所 2012)、江戸の佐賀藩中屋敷跡(四門 2017)で将軍家献上用 鍋島後期の皿が出土している。また、佐賀藩の上級家臣の家に伝世している例が少なからずみ られる。よって、こうした将軍家献上用で裏文様に牡丹唐草文を描いた皿は地元の佐賀に多く 残ったと推測され、O. スミスコレクションの鍋島皿が1種以外、すべて裏文様が牡丹唐草文 であり、もっとも一般的な裏文様の七宝結び文皿がないのは佐賀で主に集められた鍋島と推測 できる。また、図 46 の染付枇杷文皿の類例に 1842 年の紀年があるものが図 47 である。高台

内に「天保十一庚子年三月釜御献上」などと記される。将軍家への献上品の作品と推測できる。 の. スミスコレクションの別の裏文様を描く皿はリンドウ車と思われる文様を中心に描く(図 48、UEM6323)、藤のようにも見えるシダ状文様である。以前は「シダ状文」と推測したことがあったが、幕末に藤文を裏文様として描いた例があり、京都の公家の「久世三位様の御頼み」とあり、「嘉永六丑年」(1853)と記される図案がある(矢部1981の150図))。これは幕末に江戸幕府が弱体化し、京都の天皇の存在感が増した時期に鍋島家の姻戚である久世三位通理(1815年(文化12)、8代鍋島治茂娘を妻として迎える)から1853年に注文され、京都朝廷の左大臣九條尚忠の家紋をもとに藤文を裏文様として描いた皿を作るための注文図案と推測される。同じく図案が残るのが図48裏面のリンドウ車を中心に描いたシダ状の文様を裏文様として描く皿である。鍋島家の姻戚中院通繁(1811年(文化8)、8代治茂娘を妻として迎える)の家紋がリンドウ車であり、そのために親類の京都の公家のために鍋島を作り出したものと思われる。東京では近代に鍋島家の屋敷となった遺跡出土例(東京都埋文センター2003)だけであり、佐賀藩内に残ったものと思われる。

鍋島藩窯で作られた特殊な陶磁器として、図 49 (UEM6699) のひび焼がある (類例は鍋島藩窯研究会 2002 の Fig. 124-19, 21 他)。茶飲み用茶碗程度の大きさであり、灰色の陶器土で成形し、化粧掛けをした上に呉須で山水文を描き、透明釉をかけて焼いたものである。釉に貫入が入るので「ひび焼」と呼ぶ。これは江戸での出土例はなく、伝世例 (霞会館・根津美術館・徳川美術館 1979 の図 36) もほとんどないので、佐賀藩内で用いるために作られたものと推測している。よって、これも佐賀県内で入手したと考えられるものの一つである。

佐賀県の陶磁器としては何といっても、有田諸窯の磁器である。17世紀後半~18世紀に日本の磁器の意匠などを牽引した磁器産地であり、江戸時代はふつう伊万里焼と呼ばれた。O.スミスコレクションでも、有田磁器が多い。O.スミスが来日している時期よりはるかに古いものとしては17世紀後半の青磁皿(UEM6695、図 50)があるが、次に18世紀後半頃の色絵皿UEM6622(図 51)、色絵深皿UEM6656(図 52)や蓋付碗UEM6667(図 53)がある。図 51 はアワビ形に作られた皿であり、類例は九州陶磁文化館柴田コレクション(九州陶磁文化館 1990の図 448、同 1993の図 319)にある。図 52 は高台内に「成化年製」銘を染付し、見込に環状の松竹梅文を表すことなどから、1750~90年代と推測できる。図 53 の蓋付碗は18世紀後半に現れる望料形の器形であり、高台内に「大清」銘を染付する点などから18世紀後半と推測されるが、焼継ぎを施したものがある点から、1780年代以降に日本で修理が行われたと思われる。もっとも多いのは江戸後期、つまり1780~1860年代の有田磁器である。図 54 (UEM6795)は青磁色絵の盃台である。こうした盃台を有田で多く作られるのは江戸後期である。染付では鉢(図 55、UEM6663)である。色絵のうち図 56 (UEM6649) は平底、板状粘土を屏風のように折っ

た形に成形している。縁取りに檜皮文を染付し、オモダカや水葵と思われる文様を描く。類例を知らない珍しい皿である。額形の平底の大皿が図 57 (UEM6612)、58 (UEM6648) である。図 57 は瑠璃釉地に金彩である。口縁部は 19 世紀に多くみられるようになるいわゆるイゲ縁である。図 58 は染付に金彩を加えたものである。大型の盃台(図 59、UEM6320)がある。色絵の大型の鉢でこの時期にみられる中国の竹林七賢人文様を内側面に描いたものが図 60 (UEM6614) である。外面に色絵の文様を描く。図 61 (UEM6637) も同時期の色絵鉢である。このように 0. スミスが来日した 1880 年代に、アンティークとして日本に多かった江戸後期の古伊万里が多く収集されている。これらの多くが佐賀で集められた可能性が高い。

#### 5. 佐賀から神戸へ

佐賀と、O. スミスが滞在した兵庫県神戸をつなぐ古美術品のルートについて考えてみる。中島浩氣 1936 に、1877 年、西南戦争が 5 月に終わるや、有田の中野原の久富源一は神戸元町において有田焼の貿易を開始した。種類は主に花瓶類であり、まだ多額でなかったが、神戸における有田焼貿易の始まりである。同じ年(1876 年ともある)、有田の松村辰昌は兵庫県姫路において永世社という製陶工場を創立した(1885 年(1882 年ともある)解散)。1882 年、東京の長尾景弼は田代屋の手塚五平と知り合いの関係から、神戸の栄町に田代商会の名義で肥前陶磁の貿易問屋を開業した(中島 1936 の 627 頁)。辰昌は同年、この田代商会に托して貿易を始める。永世社は職員をすべて有田から雇った。この中に馬渡俊朗がおり、彼は永世社が1885 年に解散すると、神戸田代商会に入店。田代商会は前述の通り、1882 年に問屋を開始し、有田焼の神戸貿易を盛んにした。1887 年に田代商会は解散というが、1897 年の『日本貿易商案内』(四ヶ所 1897)に「伊万里陶器其他各種」として「加納町田代支店」とある。田代商会に関連する店かと思われる。これらにより、当時の有田焼が神戸から盛んに輸出されるルートがあったことがわかる。その中で古美術としての肥前陶磁器が運ばれたか否かである。

それについては、1884 年加賀(現石川県)の古物商高田源右衛門が、神戸元町5丁目に肥前物陶器問屋を開き有田の新村外尾の前田貞八がその出荷者であった。そのころ貞八は外尾山にて製陶を始めたというのである(中島 1936 の 636 頁)。1880 年代頃、佐賀で古美術品としての陶磁器を集める動きは来日する外国人向けであった可能性は高く、それを主導したのがこの前田貞八の可能性が高い。貞八がどのようにして古物商高田源右衛門と通じたのかは不明であるが、すでに有田から神戸に進出していた前述の久富らの手づるであった可能性はある。貞八が古陶磁に詳しかった可能性がある傍証として、彼の伯父が久富昌常(蔵春亭)であり、豪商として 1841 年から長崎オランダ貿易を一手に行うとともに、古陶磁の鑑識に優れ、窯焼ではなかったが、自らその形状や文様の意匠を工夫して、一流の窯焼に作らせたという(中島

1936 の 527 頁)。先に神戸に進出していた久富源一もこの久富一門の可能性がある。また、貞 八は少年時代に江越礼太 (1892 年没) に学んだという。江越は明治前半期の有田の陶業教育 の指導者であり、徳見知愛と協力して著した『皿山風土記』に「里の畑中 野原より掘出す古 風の土焼は さて焼物の初めより今に三百七十年」と記す。まさに掘り出される陶器の時代を 「三百七十年」(270 年の誤りか)と記すのは O. スミスコレクションの図 2・4 の紙片に記し た年代表記の仕方と同じである。『皿山風土記』の年代は明記されていないが、1879 年頃と推 測される。前田貞八 (1926 年没 70 才) は 1905 年有田村長となる前田儀右衛門の前名である。 このように貞八は陶磁器製作にも関わり、村長にもなるなど地域で力を持っていたことが推測 される。

1887年に田代商会解散後、有田の赤絵屋業者合同の三業社は、馬渡を主任として、1893年、神戸栄町4丁目に肥前物の貿易問屋を開いたが(中島 1936の 643頁)、3年で解散したとある。しかし、1897年の『日本貿易商案内』に「伊万里陶器貿易商」として「栄町四丁目 肥前屋商店」とあるのが、これと推測される。馬渡は1904年に死去した。

O. スミスが神戸に滞在したとみられる  $1880 \sim 88$  年はこの田代商会が開かれていた時期に当たり、また、前述の加賀の古物商高田源右衛門が神戸元町 5 丁目に肥前物陶器問屋を 1884 年に開き、有田の前田貞八がその出荷者であった。古物商が開いた店という点から、当時の有田焼でなく、古物も扱った可能性が高く、その点では前田貞八が佐賀で古陶磁を集め、神戸に出荷したと推測される。O. スミスコレクションの内容をみても、この前田貞八により神戸に運ばれた肥前陶磁がO. スミスコレクション陶磁器の中の主を占めた可能性が高いと推測される。

次にその傍証をあげる。18世紀後半~19世紀前半頃の武内地区の製品とみられるもので、鉄釉油壷(UEM6804)の底部に「25号」の付箋が貼り付けられていたが、こうした陶磁器に「何号」と番号をつける例は江戸時代には知らない。ところが、1878年のパリ万国博の「出品目録」にみられる(前山1983の129頁)。前述の前田貞八は1885年の東京の「五品共進会」のための本郡出品人総代として手塚五平が推薦され、受賞者の中の7等賞95人のうち、佐賀県の17人の中に「外尾の前田貞八」が入っている(中島1936の637頁)。こうした陶磁器の出品をする中で「何号」と表記することも、前田貞八ならば知っていたと容易に想像できる。

さらに貞八は、明治 13 年 (1880) 有田皿山の公選戸長に名がみえる渡辺源之助の娘婿であり (有田歴民 2003 の 13 頁)、その後明治 21 年 (1888)「有田貯蔵銀行」設立に当っての発起人の一人であり (中島 1936 の 651 頁)、明治 25 年 (1892)には地元外尾宿に協立銀行を創立し前田儀右衛門の名で頭取となり、明治 38 年 (1905)には有田村長に就任するなど有力者として活躍するのである。彼の父は大地主であり、豪農であったことからも、早くに佐賀県内で有田の古伊万里だけでなく、武雄の武内の古窯跡などに詳しい人や、その特徴を研究して古そ

うな陶器を作り出せる陶工に作らせることもできたと推測される。貞八の母は杵島郡鳴瀬村(芦原)の角家出身であり(有田歴民 2003 の 7 頁)、同じ郡内の武内にも通じていたことが推測できる。

開国した日本は、来日欧米人の影響などでアンティークビジネスが始まったとみられる。この中で古窯跡の掘り出し品が商品としてアンティーク市場にいつ頃から流通したかは不明であった。それが O. スミスコレクションによって、開国間もない 1880 年代には、そうした窯跡掘り出し品が市場に出ていたことが明らかになった。そして、欠けている部分は赤い漆修理 (UEM6761 (図 13) ほか) や、似た破片を使い、間を漆で埋めて修理する、呼び継ぎという方法の修理を行った例 (UEM6763) もみられる。しかも、その窯跡に近い地域でアンティーク風に陶器を作り出し(図 26 ~ 28)、さらに、それに古色をつけるためにスス(カーボン)に埋めるなどした痕がみられること(図 26・27)も、注目される。

#### 6. 肥前陶磁器以外の日本陶磁器

肥前陶磁器以外は少ないが、注目されるのは佐賀と神戸の間に位置する山口県の萩焼の碗(図 62、UEM6718)と小皿(UEM6697 他)が4点ずつある。この藁灰釉をかけ、一部に鉄釉を流した碗・皿は、18世紀後半から19世紀にかけて萩焼の最も普及品として、日本国内の比較的広い遺跡出土例がある。碗が普通であり(類例は平凡社 1981 の図 328)、O. スミスコレクションのような小皿はほとんど知られていない。欧米文化におけるカップとソーサーを意識したものであろうか。萩焼としては大量生産品であり、これらが含まれた理由として肥前で収集したアンティーク商品を神戸に送るには山口県下関を経由したと考えられ、山口県の代表的な普及品であり、肥前陶器とは趣が異なる、これらが加わったことは極めて自然なことといえる。他に神戸に近い兵庫県三田焼もしくは三田焼系統の窯と推測される青磁小皿(図 63、UEM6688 他)の5点1組がある。口径は9.4~9.5 cmである。見込に型で鳥獣文を表している。この文様は猿と鹿が見え、これに上方に蜂巣が加われば、中国で侯爵に封じられる「封侯挂印」の吉祥の意を持つ意匠である。類似の意匠の口径11.4 cm 4の土型(図 64)が三田市三輪明神窯跡で出土している(三田市教委1999の図 47)。角形の小皿で同様の見込文様の青磁小皿は東京・汐留遺跡で出土している(図 65)。これも年代は1810~80年代と推測される。

#### おわりに

O. スミスコレクションの日本陶磁器の多くが、肥前陶磁器であったことは、加賀の古物商 高田屋であっても加賀地方の九谷窯のものでなく、「肥前物陶器問屋」とあるように、江戸時 代の日本で最大の陶磁器産地であった肥前の陶磁器を主力商品として扱ったのは当然のことで ある。そして、その古物を集めるのに、江戸や京・大阪など大都市にも多く存在していたはずであるが、新たに、地元佐賀の古陶磁に詳しい人により、古唐津のような280年くらい前の窯跡の採取品を扱ったことは、新たなアンティーク開拓の動きとして注目される5。その後の動きであるが、佐賀では、1921年に佐賀県杵島郡(現武雄市)出身で有田工業学校卒の大宅経三が『肥前陶窯の新研究 上』を出版した。その中で、紹介している古陶器の破片は大正3年(1914)「武内村大字真手野」の古窯から出た破片であるとしている。さらにこの大宅が勤める大阪毎日並びに東京日々新聞社社長本山彦一を動かし、昭和5年(1930)に武内などの38か所の古窯跡を発掘し、大センセーションを起こしたとある(中島1936の135頁)。そして肥前地方で古窯跡は多数ある中で、最も早く、1940年に真手野の窯跡が国史跡に指定されたのである。真手野の窯跡の調査研究が他よりはるかに進んでいたためと考えられ、その最初期の古窯調査の成果が O. スミスコレクションにみられるといえる。

以上のように、明治維新で大きく変化する日本の社会で、欧米の影響を強く受けて、アン ティークの商売が盛んになる。その黎明期の姿の一端を O. スミスコレクションは、映し出し たものといえるであろう。

#### 謝辞

本稿を草するにあたり、Museum of Cultural History, University of Oslo、武雄市教育委員会、およびルイーズ・コート氏、Anne・Habu 氏、櫻庭美咲氏、松瀬京子氏など多くの方にお世話になりました。また、本研究は JSPS 科研費 JP 19H01213(研究代表者 櫻庭美咲)による成果の一部です。

なお、O. スミスコレクションの陶磁器についての論考は、英文で、"Arts of Asia" 2022 誌上に掲載されたが、本稿はそれに加筆し比較資料としての図版も加えたものである。

#### 注

- 1 「肥前」とは日本の古い国名の一つ。現在の佐賀県と長崎県の多くを含む地域。肥前焼は広くは肥前国で焼かれた陶磁器の総称であるが、そのうち陶器は唐津焼と呼ばれ、磁器は伊万里焼と呼ばれるのが江戸時代には普通であった。
- 2 武雄市教育委員会所蔵の窯跡出土品を松瀬京子氏の協力で実見させていただいた。
- 3 武雄市武内町大字真手野で長く中心的な陶器製作を行ってきた丸田家の窯で、丸田宣政窯の丸田延親氏と錆谷窯の丸田雄氏に話を聞き実見した。
- 4 磁器は土型で成形した後、本焼すると、このサイズより 15%以上縮小するので、UEM6689 の口径 9.5cmはサイズ的には問題ない。ただし、文様表現の細部を比較すると、全く同じ型とは言い切れない。 他にも三田焼とする、この意匠の土型と製品の伝世例がある(兵庫県陶芸美術館 2010 の 20・21 頁)。
- 5 古窯跡からの「掘り出し唐津」の語は、明治政府が1878年のパリ万国博覧会に参加する際に、黒川真頼に依頼した『工芸志料』にみえる。「掘出唐津」とは、「寛永より享保年間に至って製する所の者なり」とあり、1624~1736年の間に作られたもので、後世に掘り出して、賞するという。同書で「掘出」を付けた陶磁器産地は他にみない。1882年に亡くなった蜷川式胤の『観古図説』(1880年)に80年前の文化(1804~1818)頃に掘り出した唐津のことをいうとある。蜷川の唐津についての

解説は正しいとは言い難いが、すでに掘り出した唐津の表現を使っており、他の産地の焼物と違って、掘り出したものがこの頃に知られていたためかと思われる。しかし、文化の頃に掘り出したということも詳細は不明である。

なお、「掘出手」など古窯跡から後世に掘り出されたものを茶道具として賞美する例は愛知県の瀬戸の例が早くからみられる(『角川日本陶磁大辞典』2022)。

#### 参考文献

有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館 2003 『研究紀要第 12 号』「有田村・前田儀右衛門とその家族」 大阪文化財研究所 2012 『佐賀藩蔵屋敷跡発掘調査報告』

霞会館・根津美術館・徳川美術館 1979 『庭焼と藩窯』

佐賀県教育委員会 1996 『内野山北窯跡』

佐賀県立九州陶磁文化館 1990 『柴田コレクション展(I)』

佐賀県立九州陶磁文化館 1993 『柴田コレクション展(Ⅲ)』

佐賀県立九州陶磁文化館 2012 『将軍家献上の鍋島・平戸・唐津』108 頁

佐賀県立佐賀城本丸歴史館 2021 『佐賀城本丸跡』211 頁

三田市教育委員会 1999 『三田焼の研究』

四門 2017 『肥前佐賀藩鍋島家屋敷跡発掘調査報告書』

武雄市教育委員会 1992 『武雄市内古窯跡分布調査報告書』

武雄市教育委員会 1993 『七曲窯跡』

武雄市教育委員会 1995 『武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅱ宇土谷1号窯跡・白木原1号窯跡』

武雄市教育委員会 1996 『武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅲ白木原2号窯跡・古屋敷窯跡』

武雄市教育委員会 1997 『武雄市内古窯跡群発掘調査報告書IV(祥古谷窯跡・新立山窯跡)』

武雄市教育委員会 1998 『武雄市内古窯跡群発掘調査報告書V(山崎御立目窯跡・釜ノ頭窯跡)』

武雄市教育委員会 1999 『武雄市内古窯跡群発掘調査報告書VI (李祥古場窯跡・土井木原窯跡)』 東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡 II』

東京都埋蔵文化財センター 2003 『永田町二丁目遺跡』

東京都埋蔵文化財センター 2009 『江戸城跡―北の丸公園地区の調査―』

長崎市教育委員会 2002 『国指定史跡 出島和蘭商館跡』

中島浩氣 1936 『肥前陶磁史考』肥前陶磁史考刊行会、佐賀県

鍋島藩窯研究会編 2002 『鍋島藩窯』鍋島藩窯研究会

兵庫陶芸美術館 2010 『型が生みだす、やきものの美一柿右衛門・三田一』

平凡社 1981 『日本やきもの集成8山陰』

前山博 1983 「明治前期、内外博覧会出品の陶磁器について」『近代の九州陶磁展』佐賀県立九州陶 磁文化館、佐賀県

矢部良明編 1981 『日本の美術第176号 鍋島』至文堂

四ケ所為五郎編 1897 『日本貿易商案内』日本貿易商案内発行所

Habu, Anne 2019 "East Asia in the Museum of Cultural History The Making of the Collection", Arts of Asia May to June, Hong Kong

Ohashi Koji, translated by Louise Allison Cort 2022 "Special Aspects of Japanese Ceramics in the Oliver Smith Collection", Arts of Asia Spring, Hong Kong



鉄絵小皿、 口径 8.5 cm、高 5.8 cm、1590 ~ 1610 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo/ Alexis Pantos, UEM6765







皮鯨手小皿、口径 11.5 cm、 1590 ~ 1610 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6727





皮鯨手小皿、口径 11.5 センチ、 1590 ~ 1610 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6728



武雄市教育委員会蔵小峠窯、





皮鯨手小皿、 1590~1610年代、肥 前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Kirsten J. Helgeland (表), UEM6729





鉄絵碗、口径 10.3 cm、高さ 6.1 cm、 1590 ~ 1610 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6759



小峠窯、武雄市教育委員会蔵





鉄絵碗、1590 ~ 1610 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6774



古屋敷窯、武雄市教育委員会蔵



灰釉小坏、1590 ~ 1610 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM**6786** 



七曲窯、 武雄市教育委員会蔵



灰釉碗、1590 ~ 1610 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6761





鉄釉天目形碗、口径 11.8 cm、高 5.8 cm、 1590 ~ 1610 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo/ Alexis Pantos, UEM6758



15



古屋敷窯、武雄市教育委員会蔵



七曲窯、武雄市教育委員会蔵



灰釉溝縁小皿、 1610~30年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos (表), UEM6724



18

宇土谷 1 号窯、武雄市教育委員会蔵

19



象嵌刷毛目小皿、 口径 13 cm、高 3.2 cm、 1610~20年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6772

古屋敷窯、 武雄市教育委員会蔵







象嵌刷毛目碗、口径 12.3 cm、高 6.5 cm、1610 ~ 20 年代、肥前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6752





古屋敷窯、武雄市教育委員会蔵



刷毛目小皿、口径 12.7 cm、高 3.2 cm、1610 ~ 30 年代、肥前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6773





小峠窯、武雄市教育委員会蔵





鉄釉小坏、1660 ~ 1740 年代、 肥前・内野山、Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6710



鉄絵碗、1800~80年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6785



灰釉鉄釉流碗、口径 10.5 cm、高 7 cm、 1800 ~ 80 年代、肥前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6753



鉄絵鉄釉掛分碗、1800~80年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6781







七曲窯、武雄市教育委員会蔵



玉子手水指、口径 18 cm、高さ 10.5 cm、 1650 ~ 1740 年代、肥前、Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6750



吳須絵象嵌大皿、口径30 cm、高4.5 cm、1750~1810年代、肥前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6712



CONTROL OF THE PARTY OF THE PAR

吳須絵蓋付鉢、口径 25.6 cm、総高 19.8 cm、 1750 ~ 1840 年代、肥前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, Marten Teigen [Mårten Teigen] (蓋), UEM6706-2



呉須絵象嵌大皿、1750~1810年代、肥前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Adnan Icagic, UEM6713





九州陶磁文化館冨岡常泰氏贈



呉須絵碗、1750 ~ 1860 年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6745



象嵌蓋付鉢(蓋欠)1780~1840年代、肥前、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6791



黑象嵌大皿、口径 37.2 cm、高 5.5 cm、1800 ~ 60 年代、肥 前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6701



黑象嵌花生、口径 15.6 cm、高 25.5 cm、1800 ~ 80 年代、肥前、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6700





色絵素地猪口、口径 10.2 cm、高7cm、1690~1720年代、鍋島、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos (表), UEM6309-1





鍋島藩窯跡出土、 伊万里市教育委員会蔵







染付紅葉流水文皿、口径 20.5 cm、高 5.5 cm、1770 ~ 1820 年代、鍋島、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6324





染付山水文皿、 口 径 11.5 cm、高 3.5 cm、 1780 ~ 1820 年代、鍋島、 Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6309-2





染付水仙文大皿、口径 34 cm、高 11.5 cm、1800 ~ 40 年代、鍋島、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos, UEM6327





染付花筏文皿、口 径 19.9 cm、1750 ~ 70 年代、鍋島、九 州陶磁文化館蔵

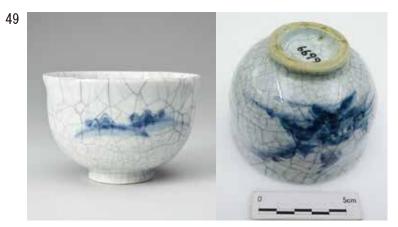


染付枇杷文皿、1820 ~ 60 年代、鍋島、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6322



染付枇杷文皿、口径 20.5 cm、1842 年、鍋島、九州陶磁文化館百渓正明氏贈





陶胎染付山水文碗、口径 10.2 cm、高 6.5 cm、 1750 ~ 1840 年代、鍋島、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos (表), UEM6699





青磁輪繋ぎ皿、1660 ~ 90 年代、 肥前・有田、Museum of Cultural History, University of Oslo/ Marten Teigen [Mårten Teigen] (表), UEM6695





色絵鮑形皿、1730~60年代、肥前· 有田、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos (表), UEM6622





色絵皿、1750 ~ 90 年代、肥前·有田、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6656





色絵碗、1750 ~ 90 年代、肥前・有田、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6667



青磁色絵盃台、1780 ~ 1820 年代、肥前·有田、 Museum of Cultural History, University of Oslo/ Marten Teigen [Mårten Teigen] (表), UEM6795



染付鉢、口径 22.2 cm、高さ10.5 cm、1800~40 年代、肥前・有田、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos(表), UEM6663





色絵皿、長径 16.2 cm、 短径 13.5 cm、高 2 cm、 1800 ~ 60 年代、肥前・ 有田、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos (表), UEM6649





瑠璃地金彩大皿、1800 ~ 60 年代、肥前·有田、 Museum of Cultural History, University of Oslo/ Marten Teigen [Mårten Teigen], UEM6612



金彩大皿、1800~ 60年代、肥前·有田、 Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6648



染付盃台、1820~60 年代、肥前·有田、 Museum of Cultural History, University of Oslo/ Marten Teigen [Mårten Teigen], UEM6320



色絵竹林七賢人文鉢、口径 30 cm、高 15.3 cm、1820 ~ 60 年代、肥前・有田、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos(表), UEM6614



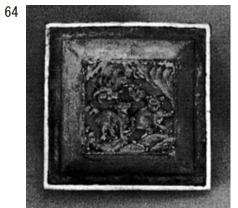
色絵鉢、1820 ~ 60 年 代、肥前・有田、Museum of Cultural History, University of Oslo, UEM6637



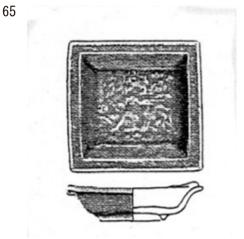
藁灰釉鉄流し碗、口径 13.1 cm、高さ 7.1 cm、1750 ~ 1880 年代、萩、Museum of Cultural History, University of Oslo/Alexis Pantos (表), UEM6718



青磁小皿、1810 ~ 80 年代、関西・三田か、 Museum of Cultural History, University of Oslo/Adnan Icagic (表), UEM6688



一九八六より)研究保存会編『古三田青磁第二集』三田焼の土型(古三田青磁・三田焼



東京都埋文センター 二〇〇〇より港区汐留遺跡(伊達家)出土、

## 肥前小城松香渓焼の基礎的研究

德永 貞紹

#### 1. はじめに

肥前佐賀藩鍋島家の分家である小城鍋島家は、佐賀藩初代藩主・鍋島勝茂の長子元茂に始まる。元茂は祖父である藩祖直茂の隠居領を継ぎ、後に小城郡を中心に7万3千石を領する支藩・小城藩の初代藩主となった。小城鍋島家が小城桜岡に屋敷(陣屋)を築き家臣屋敷を含めた陣屋町が形成され始めるのは2代直能の治世であり、在国の間に小城に常住するようになったのは3代元武からで、元禄3年(1690)以降のことという(岩松1974・野口2019)。

小城藩が領内の小城松香渓(松渓・松香谷・松ヶ谷)で生産に関与した磁器窯は、佐賀藩が 将軍家献上を主目的として設置した鍋島藩窯に準えて小城鍋島家の御用窯ともされ、現在その 製品は「松香谷焼」「松ヶ谷焼」「松香渓焼」などと呼ばれている。

しかし、その実態は僅かな伝世作品の他、断片的な史料や口碑からしか往時をうかがう術がなく、これまでの研究により事実と思われてきたことでも検証を要するものが少なくない。

本稿では、小城松香渓で生産された磁器製品を「松香渓焼」 <sup>1</sup> とし、研究史をたどって課題を抽出したうえで、現状で確認できる情報を提示して考察を加えたい。

#### 2. 松香溪焼をめぐる研究史と課題

#### (1) 江戸後期の認識

江戸後期の文政 13 年(1830)に小城藩士の犬塚市右衛門が著した『荻府見聞俚言集』<sup>2</sup> は小城領内の地誌であり、「二瀬川村」の項に「陶器ノ跡元禄之比陶器を製したる所也、今焼物竈一ツ土中ゟ出し有り、又其辺トチン土中ニ多ク有之」とあって、同地に元禄の頃に生産を行っていた陶磁器窯跡 1 基が遺り、近辺に窯道具(トチン)が埋蔵されている、との所見が述べられている(犬塚 1830)。「二瀬川村」は松香渓窯が置かれた丘陵の南側にある現在の佐賀県小城市小城町岩蔵の二瀬川地区にあたり、この「焼物竈」が松香渓焼の窯跡と考えられる。窯の稼働が元禄頃であるとするのが何に拠るものかは不明で、焼成された製品については言及がない。分かるのは、廃窯となった陶磁器窯が二瀬川に遺構を留めており、文政の頃には百年以上も昔の事と認識されていることである。

また、幕末の安政 5 年 (1858) 佐賀藩の儒学者である武富定保 (圯南) が著した『陶器賛』 3 において、日本磁器の創始に関わる言説に関連し、小城郡の「白阪嶺」にある白い磁土で「松谷」で試焼したと説明されている。圯南は文久 4 年 (1864) の『磁器七

律詩書』<sup>4</sup>でも小城白坂の「瓷堊(磁器用の白土)」を採って「松谷」において磁器を創始したと記す。磁土の採取地とされた小城の「白阪嶺」「白坂」は小城の清水から山越えする白坂峠とその南側付近と思われ、小城「松谷」は松香渓のことを指す可能性がある。ただ、何を根拠とした記述であるかはまったく不明で、松香渓焼との具体的な関係もわからない。ここでは幕末に佐賀藩の儒学者が小城「松谷」で地元産の磁土を原料としてかなり古くに磁器生産が行われていたと認識していた、ということに留めておきたい。

#### (2) 明治~大正期の認識-『工藝志料』

松香渓焼(窯)について公刊された文献に記述があるのは、管見の限り「松ヶ谷窯」として紹介された明治11年(1978)の『工藝志料』(黒川1978)が最も早い。典拠は不明だが、要点としては、1)小城鍋島家が始めたこと、2)開窯は享保年間で50年に満たない操業であったこと、3)創始には有田等の陶工が招かれたこと、4)製品は鍋島焼に似る精製磁器で染付等を施さない白磁と青磁であること、である。その後、日本各地の陶磁器について紹介した明治33年(1900年)刊行の『陶器類集』(高木1900)で「松ヶ谷焼」、大正2年(1913)の『日本陶器全書』(大西編1913)では「松ヶ谷窯」として解説されているが、内容は後者で「白磁無彩の茶器なり」とする以外、いずれも『工藝志料』の踏襲にとどまっている。

#### (3) 史料・伝世品の「発見」と窯跡の「発掘」

研究が大きく進展したのは昭和9~10年(1934~1935)で、中心的な役割を果たした人物は小城出身の馬渡八太郎と太田保一郎である。小城藩史編纂会がまとめた「松香渓焼ノ件」(支部扣書)という編纂史料に馬渡が着目し、情報提供された太田が佐賀の地域誌である『佐賀郷友』で史料紹介を行った(太田1934)。

馬渡が見出し太田によって公表された「松香渓焼ノ件」の内容は、小城藩の日記や藩主の年譜等から引用した史料と確実な伝世品の銘文を示し、松香渓焼の沿革を述べたものである。引用史料は、松香渓皿山に関する記事、焼物師や赤絵師に関する記事、陶磁器の献上・贈与に関する記事に加え、皿山設置の背景と考えられた松香渓御茶屋に関する記事である。また、松香渓焼の確実な伝世品として紀年銘の染付大鉢と染付大香炉の2例を挙げ作品の特徴や銘文を記している。沿革では始まりを「松香渓別墅」すなわち松香渓御茶屋の建築と同じ天和年間頃と想定し、記録が散見される元禄・宝永の頃は小城鍋島家の御庭焼だったものを、享保11年(1726)に小城藩の事業として皿山方を設置し、6代管資治世まで継続したものらしいとする。なお、江戸から下国後に松香渓へ居住した2代直能の後妻である長寿院のために製陶が行われたとの口碑を紹介しつつ、それ以前に開窯したことは旧記から明らかとしている。陶工については記

録と画風からみて有田から召し抱えたとした。 2 例の紀年銘資料は「松香渓焼ノ件」の紹介に際し写真が掲載され(太田 1934)、具体的な作例が初めて世に知られることになった。

同年に刊行された『小城郡誌』では、「松ヶ谷焼」の項目(小城郡教育会編1934a)で『工藝志料』に基づく説明に加えて、「竈床を造っていた土の塊が今尚竈跡附近に散在」するという窯跡の現状を述べるほか、『工藝志料』にない所見として「陶土は多く有田から取り入れた」と伝えられると記す一方、近隣の「清水焼山」付近に陶土層が露出しており、実験の結果は良好であったとの有田工業学校長の証言を紹介している。一方、古文書の項(小城郡教育会編1934b)に「松香渓焼之起源」と題し抜粋で紹介された「松香渓焼ノ件」では「陶土の如きは何地に之を求めしや記録の徴すべきなきを遺憾とす」として原料は不明とされている。原料に関しては口碑と推論が入り混じっており、その後も実証的な研究は進んでいない。

翌年の昭和10年(1935)、馬渡から情報提供された許斐友次郎が古美術雑誌の『茶わん』に「松香渓焼ノ件」の内容と紀年銘資料の写真を紹介し(許斐1935)、全国誌への掲載によって『工藝志料』以来の認識が大きく変わることとなった。

同年、馬渡は自ら窯跡の「発掘」を行って出土資料の一部を紹介し(馬渡 1935)、調査後は 窯跡に記念碑を建てて保護・顕彰を図った。馬渡による発掘では、二重方形枠に草書体の福字 を入れる、いわゆる「渦福」銘のある染付皿片が得られ、当時は柿右衛門が多く用いた銘と認 識されていたことから「松香渓焼ノ件」に引用された「有田焼物師酒井田藤九郎」の記事と併 せて、松香渓窯での生産に酒井田家が関与した物的証拠と見なされたのである(馬渡 1935・ 太田 1935)。馬渡は窯跡で発掘した「渦福」銘の磁器片と併せ、紀年銘資料以外の松香渓焼と して自身所蔵の「祥瑞手染付中皿径六寸五分。裏面周囲に唐草模様糸底内に角松印の染付あり。」 と小城の旧家所蔵の「染付小丼径五寸。裏面周囲に唐草模様糸底に角福印の染付あり。」の2 例を挙げた。前者は「松ヶ谷焼の窯印は多くは二重角の中に松の字「松」の染付」という所見 によるもので、後者は窯跡から得られた資料等との比較で松香渓焼と判断されたものらしい。

### (4) 色絵焼成説といわゆる「松ヶ谷手」をめぐる議論

研究が大きく進んだ直後の昭和11年 (1936)、『陶器大辞典』で「松ヶ谷窯」の項目を担当した寺内信一は、先行研究を引用しつつも「上絵附物が多数ある」とし (寺内 1936)、同年に『肥前陶磁史考』を刊行した中島浩氣も「上絵附の如きは全く柿右エ門式」そのままで、青磁もあるとした (中島 1936)。それまでも「稀に色絵もあり」(許斐 1935) との見解はあったが、松香渓焼における色絵製品の存在が積極的に主張され始めた背景は不明である。

第二次大戦後の昭和32年(1957)、今泉元佑は、その後に「松ヶ谷手」と俗称されることになるタイプの色絵磁器を「松ヶ谷」とし、「先祖代々この様な色鍋島と違う色彩のものを松ヶ

谷だと教えられて来た」ことを根拠に挙げた<sup>5</sup>。その一方、「有田皿山や南川良山にお好みの品を特別に註文して焼かせた」ものも含む「広義に解釈して渋いお茶好みの作品」を「松ヶ谷」と称して差し支えないとした(今泉 1957)。

これに対し永竹威は、今泉の言う「松ヶ谷色絵」について「いつの頃から、口伝えで、この種の色絵磁器を「松ヶ谷焼」といった呼び方をしたかも、きわめてあいまい」で、松香渓焼とは別系統であると批判した(永竹 1975)。

今泉が提唱した「松ヶ谷色絵磁器」とは、実際は17世紀中葉に有田で生産された草創期の 鍋島焼と関わるものであることが後に明らかになり、(大橋1987)<sup>6</sup>、松香渓焼における色絵 製品については否定的に捉えられるようになった。

#### (5) 研究の展開と考古学的調査

柿右衛門窯の総合調査に関連し、柿右衛門傍系として松香渓焼を考察した永竹威(永竹1957)は、2代直能の年譜に天和3年(1683)正月の「月岡御茶屋」作事開始が松香渓御茶屋の始まりとある点を踏まえ開窯を天和の末頃かとした。製品は藩主の御用品と献上や贈答用と推測し、傍証として3代元武と親交のあった徳川(水戸)光圀から元武に宛てた書簡に「見事な釘かくしの焼物下され何より重宝仕り候。よき手ぎわにし目をおどろかし」とあること<sup>7</sup>や元武の年譜にみえる贈与関係記事を例示している。製品についてはすべて磁器で、種類は染付、青磁、染付青磁で、赤絵付したものは稀(色絵は有田に委託)とし、2例の紀年銘資料と馬渡が示した2例に加え、新たに6例を松香焼として挙げているが、篆書体の「松」銘を施すもの以外は松香渓焼とする具体的な根拠がわからない。

二重方形枠内に篆書体の「松」字を入れる銘(以下、便宜的に「角松銘」とする)は「渦福」銘と共に松香渓の銘とされていたが(馬渡 1935・陶器全集刊行会 編 1937)、永竹は円形枠内に篆書体の「松」字を入れる銘(以下、「丸松銘」とする)も松香渓焼の銘として作例を紹介した(永竹 1957)。この「丸松銘」については、その後、有田南川原の樋口窯跡から同銘の陶片が出土し、松香渓焼とされた製品に意匠が類似した 18 世紀後半の宝暦から天明期頃の陶片も同窯跡にみられることから、小城松香渓ではなく有田南川原の銘であることが明らかにされている(大橋 1983)。

松香渓焼窯跡は昭和30年代以降に蜜柑園として開発され、昭和54年(1979)に肥前古窯跡分布調査で行われた現地踏査の際は地表で遺構が確認できず、焼土・窯壁・磁器片・窯道具がわずかに散布する程度であったという<sup>8</sup>。その後、窯跡のすぐ側を九州横断自動車道(長崎自動車道)が通ることになり、昭和59・60年(1984・1985)に佐賀県教育委員会による事前の確認調査が行われたが、自動車道の建設予定地内で明確な遺構の存在は認められず、本調査に

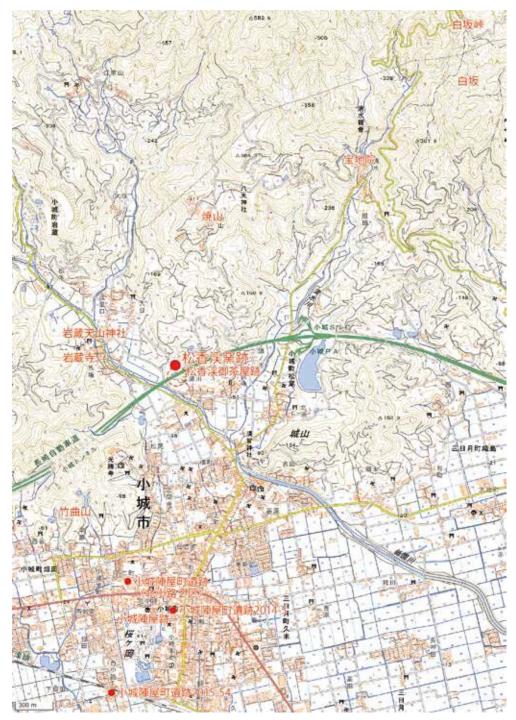


図1 松香溪窯跡と関連地(国土地理院 電子国土 Web 標準地図に加筆)

は至っていない(佐賀県教育委員会 1985・1986)。分布調査時の採集資料や窯跡付近での確認 調査出土資料は公表される機会がなく、その後も窯跡本体や物原の学術的な発掘調査は行われ なかったため、生産遺跡として遺構や遺物を検討する材料がなく、松香渓窯に関する調査研究 はしばらく停滞した。

しかし、平成18年(2006)に小城市教育委員会が行った小城陣屋町遺跡(北小路2区)の

発掘調査により松香渓焼の可能性のある磁器製品が複数例出土し、調査報告書に現存する宝地 院伝世の染付亀文大皿と松香渓窯跡で採集された製品や窯道具の実測図が掲載されたことで、 松香渓焼研究の重要な基礎資料が共有され(永田 2010)、再検討する条件がある程度整った。

以上の研究史を踏まえ、本稿では松香渓焼に関し次のような資史料の検討を行って考察する。 先ず、松香渓焼の製品と特徴について、紀年銘資料と窯跡採集資料を基点とし、松香渓焼の可能性がある近年の小城陣屋町遺跡出土資料とこれまで松香渓焼として紹介された伝世資料を検討する。次に小城藩の史料から松香渓窯の開窯と存続期間、小城藩と焼物師・赤絵師の関係、 小城藩(小城鍋島家)の陶磁器献上・贈与に関するものを抽出して検討する。

### 3. 松香渓焼の製品と特徴

#### (1) 松香渓焼の紀年銘資料

銘文の内容から松香渓焼であることが明らかな作品は次の2例で、いずれも紀年銘がある基準資料であるが、見瀧寺宝地院伝世の染付亀文大皿のみが現存する。

### ① 見瀧寺宝地院伝世 染付亀文大皿 (図2)

清水の滝で知られる清水山見瀧寺宝地院(佐賀県小城市小城町松尾)に伝世した現存する唯一の確実な松香渓焼である。小城市重要文化財で、現在は小城市立歴史資料館に展示されている。

口径 36.2~36.9cm、器高 5.4~6.4cm、底径 19.1cm の染付大皿で、内面全体を大きく使っていわゆる養亀を描く。線描きと濃淡を使い分けた濃みで絵付けが施されるが、ぼかし濃みも繊細なグラデーションは表現されておらず、墨弾きなども用いられていない。亀は首を高く上げて左側を向き、顎髭を蓄えている。亀甲文で埋めた甲羅の中央に白抜きの「壽」字を配し、縁は雪輪状に表現する。甲羅の後方から皿の口に沿うように上下に伸びる毛のような藻は一本ずつ線描きした上に面的に濃みを重ね、描線にはつなぎがやや目立つ。外側面は意匠化された3つの花文を連続する唐草文で結び、線描きした中を濃みで埋める。筆致にはやや粗さがあるが文様の構図や表現は優れ、裏文様の丁寧な割付からも特別に誂えた品であることが窺える。高台外面に2条、高台の内外に各1条の圏線を引き、高台内に小さめのハリ支え痕が7つある。素地は白く、釉薬もあまり青みがない点は、後述する窯跡採集資料の一般品とは異なっている。高台内中央に二重方形枠で囲んだ「元文三歳/戊午四月/松香焼/木下氏之書」の染付銘があり、元文3年(1738)という製作年、「松香焼」の名称、「木下氏」なる関係人物の存在がわかる。「木下氏」に関しては、本資料が最初に紹介された際に「元文三年皿山方となりし木下伝左衛門なるべし」と考証されている(太田1934)。。



図2 見瀧寺宝地院伝世 染付亀文大皿 見瀧寺宝地院所蔵 (実測図:永田 2010)

### ② 岩蔵寺伝世 染付山水文大香炉(図3)

岩蔵寺(佐賀県小城市小城町岩蔵)に伝世した紀年銘資料であるが、昭和59年(1984)に同寺の火災により滅失したとされ(小城町教育委員会1986)、公表された写真や所見以外に新たな情報を得ることができなくなった。袴腰形の染付香炉で口径29.3cmの大型品である。体部2方に主文様の山水文を描き、頸部は菊文を配した窓を四方襷文で繋ぐ。口縁上面の5方にも濃み塗りを施し、三足は浮き彫りによる菊花で飾る。高台内には「奉寄進/天山宮/松香谷皿山/元文四歳/未九月吉日」の染付銘があり、元文4年(1739)に天山宮(岩蔵天山神社)への寄進として製作されたことと「松香谷皿山」の名称がわかる。

器形はやや異なるが、頸部の文様構成が柴田夫妻コレクションの色絵牡丹文香炉(図4:総目録3270:1740~1770年代)に近く、同コレクション染付山水文香炉(図5:総目録3408:





図3 岩蔵寺伝世 染付山水文大香炉 (永竹 1957)





図4 色絵牡丹文香炉 柴田夫妻コレクション 図5 染付山水文香炉 柴田夫妻コレクション

1750 ~ 1780 年代) と三足に浮き彫りの菊花文を施す点が共通するなど、有田の 18 世紀第 2・3 四半期頃の製品との類似点がみられる。

### (2) 松香渓窯跡の発掘・採集資料

#### ① 昭和10年(1935)の「発掘」資料(図6)

昭和10年(1935)1月6日に馬渡八太郎 が松香渓窯跡から発掘した資料のうち、公表されているのは染付皿の底部小片1点の みである。外底に二重方形枠内に草書体の 福字、いわゆる「渦福」の染付銘とハリ支

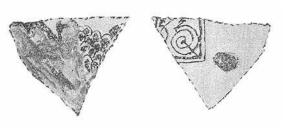


図6 昭和10年の「発掘」資料(太田1935)

え痕があり、染付文様が描かれた見込み側に熔着痕があるという(馬渡 1935・太田 1935)。馬渡が所蔵する染付輪花皿と同一の破片も出土したと記されるが(馬渡 1935)、図・写真や詳しい説明もないため具体的にはわからないし、他の発掘品を含めて現在の所在も不明である。

#### ② 昭和54年(1979)の採集資料(図7)

佐賀県教育委員会が実施した肥前古窯跡分布調査において昭和54年(1979) 1月31日に松香渓窯跡の現地踏査が行われた際に採集された磁器片と窯道具である。現在は九州陶磁文化館が保管しており、数は少ないが松香渓焼の実態をうかがう上で重要な手がかりとなる。

製品は磁器片9点で、文様のあるものは染付、確認できないものは白磁か染付の無文部破片である。外面にコンニャク印判で桐文が施された碗(1)は焼成不良で釉薬もうまく熔けておらず、他にも焼成時に歪んだものがある。焼成不良や焼き歪みの状態等からいずれも松香渓窯で生産され失敗品として廃棄されたものと考えられる。器種は皿・碗・瓶類で、皿(8)にはハリ支え痕がある。全体に素地は灰色がかっており、釉薬は青みがある。高台畳付など露胎部は鉄分の関係か赤みをおびる。製品の年代はおおむね18世紀前半とみられる。窯道具はハマ5点とI字形トチン6点で、ハマのうち小型の3点は磁器・炻器質、残りのハマ2点とトチンは陶器質である。

### ③ 昭和60年代(1985~1988)の採集資料(図8)

小城・多久地区担当の佐賀県文化財保護指導委員(文化財パトロール員)が、昭和60年代 に松香渓焼窯跡の所在する丘陵で表面採集したという若干数の磁器片・窯道具・窯壁片である。



図7 昭和54年の採集資料 佐賀県立九州陶磁文化館保管

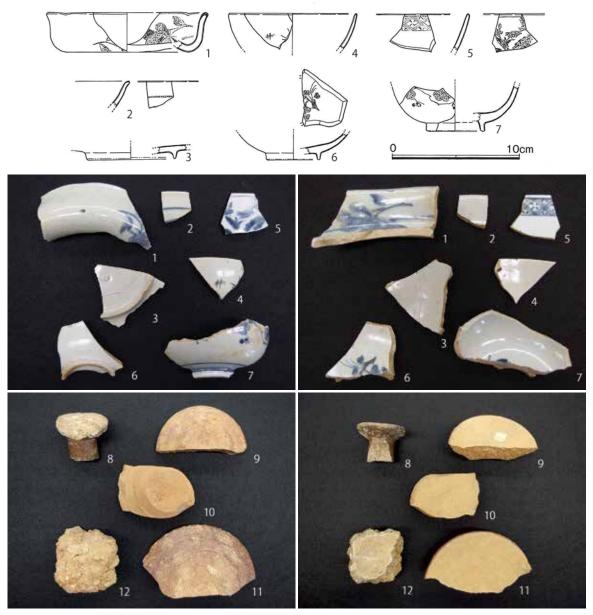


図8 昭和60年代の採集資料 小城市教育委員会所蔵 (実測図:永田2010)

小城市教育委員会が保管しており、実測図・写真と所見が公表されている(永田 2010)。

製品は磁器片 7 点で、文様の有無が不明な 1 点を除き染付である。個々の採集地点まではわからないのですべての磁器片が窯跡に由来するものとは断言できないが、焼き歪みの大きいものがあることや、素地や釉薬が昭和 54 年(1979)採集資料と近似する点から松香渓窯で生産・廃棄されたものである蓋然性は高い。器種は皿・碗類などで、3 の高台内に小さなハリ支え痕が残る。全体に素地は灰色がかっており、高台畳付の露胎部が赤みをおびるものがある。釉薬は青みや灰色がかった青みがあるが、5 のみ素地も白く他とやや異なる。年代はおおむね 18 世紀前半とみられる。窯道具はハマ 3 点と I 字形トチン 1 点で、すべて陶器質である。その他、窯壁片かと思われる 1 点がある。

#### (3) 松香渓焼の可能性がある出土資料

### ① 小城陣屋町遺跡出土資料(図9)

小城陣屋町遺跡は、小城鍋島家の屋敷(小城陣屋)に付随する家臣屋敷・町屋・寺社等からなる陣屋町の跡である。北小路2区の発掘調査で有田とはやや異なる文様や器形の特徴がある18世紀前半頃の染付磁器が複数例出土して松香渓焼である可能性が指摘された(小城市教育委員会2010)。陣屋跡を挟んで800m以上離れた別の調査区でも同じ器形の資料(2)が出土している(小城市教育委員会2019b)。1~4は体部が屈曲する特徴的な器形の碗で、外面体部に文様を施す。1は鍋島氏の家紋に用いられる杏葉紋(花杏葉紋)のみ主文に配し、2は魚藻文を線描きと濃みで描く。3・4は1・2と器形がやや異なり、絵付けも線描きと濃みを使い分けず付立のように描くという違いがある。5は小型の丸形碗で桜文、6は丸形碗で鉄線文を描く。7~10は輪花小皿で、外側面に線描きの連続唐草文を巡らせる。7・8は二重圏線で区切った見込みの中央に3頭の蝶を組み合わせて配し、内側面は牡丹唐草文で埋める。どちらも焼成不良で器形・文様も同じことから揃いであったものと思われる。9は口縁が短く外反する器形で、内面には牡丹文を描く。10の内面に描かれる松葉松笠文は柴田夫妻コレクショ

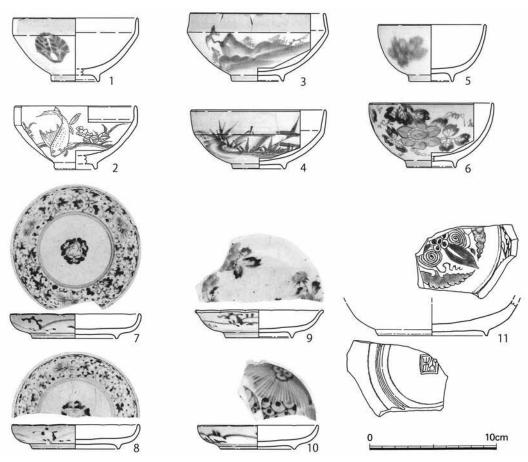


図 9 小城陣屋町遺跡出土資料 (小城市教育委員会 2010 · 2019b)

ンの染付青磁松葉松笠文輪花小皿 (総目録 3227:1740~1760年代)にみられる有田の18世紀中葉の表現に類似する。松香渓焼の可能性がある1~10の素地は全体に灰色がかり、釉薬はやや青みないし灰色がかった青みを帯びる。年代は、おおむね18世紀前半を中心とし、下限は18世紀中葉までには収まるものと思われる。11は陣屋跡の東に近接する別調査区出土の染付皿で(小城市教育委員会 2019b)、素地や釉薬は他の資料より白く、呉須の発色も明るく良好で、見込みは組み合わせた唐花唐草かと思われる文様を描く。高台内中央に「角松銘」があり、この銘は先述したように松香渓焼の銘と考えられてきたものである。年代は文様の表現等から18世紀中葉より降らないと考えられる10。素地や釉薬の特徴は窯跡採集品とは異なるが、有田でも窯跡からの「角松銘」出土例は確認しておらず、松香渓焼でないとも言い難い。「角松銘」については、今後、生産地と消費地の双方で出土例の確認が期待される。

### ② 長崎自動車道建設に伴う確認調査出土資料(図10)

松香渓窯跡が所在する丘陵を横切る九州横断自動車道(長崎自動車道)の建設に先立って昭和59・60年(1984・1985年)に「松ヶ谷窯跡」として佐賀県教育委員会が行った確認調査で若干数の磁器片が出土し、佐賀県文化課文化財保護室が保管している。明確な遺構などは確認されず本調査に至らなかったため、出土資料についてこれまで報告されたことがなかった。



図 10 長崎自動車道建設に伴う確認調査出土資料 佐賀県所蔵

資料は磁器片36点と炻器質の陶片1点で、窯道具などはない。染付を中心に白磁もあり、 色絵2点を含む。年代は18世紀前半頃を中心とするが17世紀後半に遡るものもあり、窯跡採 集資料と比べると年代幅が大きい。また、焼成があまくやや歪みのあるものや底部が少しへた るものもあるが、明らかに窯跡で廃棄されたと思われる状態のものはなく、生産地というより 消費地の様相を示している。調査対象地は窯跡には近接するものの丘陵上にあたることから、 これらは窯跡で廃棄されたものではなく、この辺りにあった松香渓御茶屋や僧庵などに関連す る可能性が高い。資料群の中に松香渓焼が含まれることは考えられるが、窯跡採集品にあるよ うな灰色がかった素地や青みをおびる釉薬などの特徴をはっきりと持つものはなく、識別はで きていない。3は体部外面にコンニャク印判を主文として配した小ぶりの碗で、窯跡採集資料 (図7-1)に類似する。素地はやや灰色がかり、釉薬には青みはないが透明感がなく濁る。 9 は内側面に繊細な草文を施し、見込みは圏線で区切る輪花小皿で、外側面は線描きの唐草文 を巡らせる。素地はやや灰色がかり、釉薬は少し濁る。底部がややへたっている。10・33・34 は同一個体と思われる芙蓉手の大皿で、口縁が折れる鍔皿である。焼成は甘く、釉薬はやや青 みをおびて貫入が目立つ。なお、色絵2点のうち、13は椿かと思われる花文を描く蓋、25は 表裏両面の同じ位置に傷隠しと考えられる色絵がある染付の梅文を施す皿か碗の小片である。 17世紀後半頃のもので、松香渓焼の色絵生産を示す資料ではない。

### (4) 松香渓焼として紹介された資料

紀年銘資料2例を除き、これまでの研究で松香渓焼の伝世品 として写真等を挙げて紹介された資料のうち、その可能性のあ るものについて検討する。

### ① 染付松竹梅葡萄文輪花皿(図 11)

紀年銘資料以外に松香渓として初めて紹介された2例の1つで(馬渡1935)、現在の所在は不明である。二重圏線で区切った見込みに松文・竹文・梅文を配して、内側面は竹文で二分した画面に葡萄文を描き、外側面は連続する如意頭唐草文を巡らせる。高台内外に圏線を引き、中央に「角松銘」を入れる(永竹1957)。年代は18世紀前半~中葉と考えられる。

#### ② 染付青磁葡萄文小皿 (図 12)

松香渓焼の例として紹介された資料の一つで(永竹 1957)、 現在の所在は確認できていない。二重圏線で区切った見込みに 3単位を組み合わせた葡萄文を描き、内側面から外面の高台際





図 11 染付松竹梅葡萄文輪花皿 (永竹 1957)

まで青磁釉を掛ける染付青磁の小皿である。高台内に圏線を引き、中央に「角松銘」を入れる。年代は18世紀前半~中葉と考えられる。

この2例が松香渓焼とされた大きな根拠は「角松銘」であろう。「角松銘」の遺例は極めて少なく、その可否は今後の課題 だが、可能性は十分にあると今のところ考えている。

# (5) 松香渓焼製品の特徴について(予察) 松香淫焼については可能性のあるものを含

松香渓焼については可能性のあるものを含めても資料数があまりに少なく、その特徴を現段階で明確にすることは困難であるが、今後の予察として何点か触れておきたい。

製品は磁器であり、種類としては確実な紀年銘資料のある染 付が主と考えられ、白磁も可能性がある。「角松」銘が松香渓 焼固有のものであれば染付青磁も生産されたことになり青磁も



図 12 染付青磁葡萄文小皿 (永竹 1957)

ありうる。色絵磁器は可能性までも完全に否定するものではないが、松香渓で生産されたとする根拠はない。

成形はロクロ成形で一部は型打ちを用いている。糸切細工は今のところ確認されていない。 窯詰めについてはハリ支えはあるが、蛇ノ目凹形高台やチャツの使用は認められず、足付ハマ・ 蛇ノ目釉剥ぎなどの重ね焼きも今のところない。

紀年銘資料で唯一現存する染付亀文大皿が代表作であることは間違いないが、特別に作られた製品の特徴が全体に適用できるかは疑問である。窯跡やその付近で採集され焼成時の不良品として廃棄された可能性が高い一般品の磁器片を見ると、灰色がかった素地や青みをおびる釉薬などが目立ち、小城陣屋町遺跡から出土した資料の多くにもそうした特徴が認められる。

特徴的な器形として小城陣屋町遺跡で出土した屈曲形の碗がある。18世紀の肥前磁器碗ではあまりみない形状であるが、小城陣屋町遺跡では異なる調査地区で同じ器形が確認された。 屈曲形碗が2例出土した北小路2区SD13からは器形が似通った肥前陶器の碗も出土している (図13)。この肥前陶器碗は京焼系陶器の「半筒形碗」と呼ばれるタイプを写したものと思われ、

京焼系陶器ないしそれを写した肥前陶器碗が、小城陣屋町遺跡出土の松香渓焼の可能性がある屈曲形染付磁器碗のモデルだったのではないだろうか。図9-3・4の付立のような描き方も雰囲気が共通する。

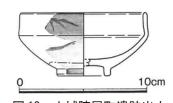


図 13 小城陣屋町遺跡出土 (小城市教育委員会 2010)

松香渓焼とその可能性がある資料に施された染付文様の種類や (小城市教育委員会 2010)

表現は多くが18世紀前半~中葉頃の有田、おそらく南川原系に系譜を求められそうで、南川原の上手製品と比べると総じて筆致がやや粗いのは松香渓焼の特徴と言えるかもしれない。

### 4. 松香渓焼に関する史料の再検討

#### (1) 小城鍋島文庫・肥前国小城鍋島家文書における関係史料

松香渓焼に関する史料としてこれまで取り上げられてきたのは、小城藩の日記や藩主の年譜などの記事であり、「松香渓焼ノ件」という編纂史料が手がかりとされてきた。「松香渓焼ノ件」は明治後期から昭和初期の小城藩史編纂会<sup>11</sup>でまとめられたもので、馬渡八太郎が着目し、馬渡から情報提供された太田保一郎が『佐賀郷友』で史料紹介して(太田 1934)以降、松香渓焼研究の基本資料として重視されてきた。「松香渓焼ノ件」は、現在は失われた一次史料を引用するなど松香渓焼を検討するうえでは欠くことのできない重要史料であるが、明治後期以降に編纂された二次史料であること、馬渡が見出したものが「松香渓焼ノ件」の原本ではなく控えであったこと、さらに史料紹介に際し誤記(または誤植)や欠落、新たな注記があることなどには注意を要する。

今回検討する関係史料には、佐賀大学附属図書館所蔵「小城鍋島文庫」のうち小城藩『日記』の記事目録である『日記目録』や藩主年譜など何らかの形で翻刻・公開されている史料と人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵「肥前国小城鍋島家文書」の『松香渓焼ノ件』を用いた。『日記目録』については、近年、記事を翻刻しデータベースとして公開する事業が進められ(伊藤 2017)、令和4年(2022)までに現存するすべての『日記目録』記事がオンラインで公開された(「小城藩日記データベース」(佐賀大学附属図書館所蔵) https://crch.dl.saga-u.ac.jp/nikki/)。これによって『日記目録』が現存するものには限られるが、小城藩日記の事項をテキスト検索することが可能となり、これを活用して関係事項を探したところ、「松香渓焼ノ件」に引用された記事に該当するものが確認できただけでなく、取り上げられていない記事があることも判明した。

また、小城藩主の年譜は佐賀県近世史料編さん事業で翻刻刊行されており(佐賀県立図書館編 2009・2011)、松香渓焼に直接関係する記事は含まれていなかったが、小城鍋島家の陶磁器献上・贈与など本稿に関連する記事が新たに確認できた。

「松香渓焼ノ件」については、小城藩史編纂会の編纂史料を中心とする国文学研究資料館所蔵の「肥前国小城鍋島家文書」に原本と思われるものが含まれており、内容はこれに拠った。これまで紹介されてきた「松香渓焼ノ件」は馬渡八太郎が「菅井内庫所より借りたり」として太田保一郎らに提供したもので(太田1934・許斐1935)、「支部扣書」と記されることからも明らかなように、小城藩史編纂会の支部である小城菅井の小城鍋島家内庫所に控えとして保管

されていたものであろう。国文学研究資料館所蔵の「松香渓焼ノ件」と「松香渓焼ノ件(支部 扣書)」を照合すると、『日記目録』などからの引用史料については前者が「松渓」とするのを 後者では「松香渓」と表記し、「長峯藤次左ヱ門」を「長峰藤次右衛門」(傍点は筆者)とする 誤記がある他は、暦年に干支や西暦が注記されるくらいであるが、「松香渓焼ノ起源」と書き 起こす沿革の説明については「延享二年六代直員治世ノ始マテ約八十余年間継続シ」を「六代直員ノ治世マテ継続シ」、「正徳二年江戸ヨリ下国」を「宝永七年12 (庚寅、一七一〇) 江戸ヨリ下国」、「陶土ノ如キハ」を「陶工ノ如キハ」、とするなど一部だが脱字・誤字や書き換えにより意味が変わった箇所があった。また、国文学研究資料館所蔵の「松香渓焼ノ件」は2つの 史料から成り、太田が紹介した「松香渓焼ノ件」に相当する罫紙綴じの一冊には「第三名物壱号」、小城藩日記から磁器注文に関する記事を抜き出した一枚には「第三名物弐号」と記されている。

### (2) 史料にみる松香渓焼の開窯と存続期間

小城藩日記の記事目録である『日記目録』の享保 10 年 6 月 14 日付で「今般焼物山御取立二付心遣役木下伝左衛門高間玄可被仰付候事」(史料 1)、同年 7 月 1 日付で「皿山仕組事繁相成候」(史料 3) などとあり、享保 10 年 (1725) に小城藩が「焼物山(皿山)」を設置したことがわかる。この「焼物山(皿山)」が松香溪に置かれたことは、翌年の『日記目録』記事に「松溪焼物方」「松溪皿山」(史料 6 ・ 7) と記すことから明らかであり、実際の焼成がいつから始まったかは不明だが、松香渓焼の開窯は享保 10 年 (1725) とすることができる。従来は、皿山という形で藩の事業とする前に、松香渓御茶屋が築かれてからまもない天和年間頃から小規模な焼成が行われていたと説明され、それを裏付けるものとして有田の焼物師との関わりや陶磁器の献上贈与記事が挙げられてきたが、史料を再検討すると、有田の焼物師との関係は松香渓焼が始まっていたことを裏付けるものではなく、むしろ有田へ委託していたことを示す可能性が高い。

窯の下限については、現存する『日記目録』の関連記事は元文5年(1740)年までであるが(史料26)、「松香渓焼ノ件」に失われた『日記目録』から延享元年(1744)と延享2年(1745)の関連記事が引用されており(史料29・31)、さらに下って「諸役人帳ノ内」からの引用として延享4年(1747)年「皿山方兼勘定所役 鴨打清兵衛」(史料32)とみえるのが、松香渓窯に関し現在わかっている最後の記録である。

廃窯を明和年間(1764~1772)頃とする説(永竹 1957)は記録の残る延享以降には長く続かなかったという点から推測したものであろう。安永年間(1772~1781)とする説(中島 1936)は「松香渓焼ノ件」(支部扣書)で6代直員の治世まで継続したようだとするのを直員の没年である安永 9 年(1780)まで拡大解釈したもののようで、そもそも「松香渓焼ノ件」の原本では延享 2 年(1745)「直員治世ノ始」までとしており、二重の誤解が生じている。松香

渓焼製品の実態が十分明らかになっていない現状では延享4年以降に生産が続いたのか、続いたとしたらいつまでかについて明確な回答は出せないが、18世紀中葉には収まり、後半までには入らないと見込んでいる。現時点では記録の残る延享4年(1747)の後、下っても宝暦(1751~1764)頃までではないかと推定する。下限は明確ではないが、松香渓焼の存続期間は、18世紀第2四半期のうちか第3四半期の初めまでの短期間に収まるものと考えられる。

#### (3) 松香渓焼と松香渓御茶屋

松香渓に窯が開かれた背景として先行研究では小城鍋島家の別邸である松香渓御茶屋の存在 が強く意識されてきた。松香渓御茶屋は、天和3年(1683)に「月岡御茶屋」として作事が始まっ たと2代直能の年譜に記されており(『直能公御年譜』 佐賀県立図書館 編 2009 所収)、「松香 渓焼ノ件」で御茶屋設置から間もない天和末頃に「御庭焼」として松香渓焼が始まったとされ たことが現在まで大きな影響を与えている。元禄2年(1689)に直能が死去して以降はどのよ うに利用されていたか未詳だが、元禄 15 年(1702)に罪を得て幕府から小城藩にお預けとなっ た渡邊源三郎親子が一時的に松香渓に置かれている(『元武公御年譜』佐賀県立図書館 編 2011 所収)。宝永7年(1710)に直能の継室である長寿院(お伊賀)が初めて下国するにあたって 住居となる松香渓の修理方が置かれ、6月に松香渓に着いている(宝永7年『小城藩日記』伊 藤 編 2020 所収)。ここで晩年を過ごした長寿院は、正徳4年(1714)に病となり6月に松香 渓から西岡屋敷へ移り(『日記目録』正徳4年6月13日 佐賀大学附属図書館所蔵「小城藩日 記データベース」登録番号 2715、以下「小城藩日記 DB」番号のみ記す)、まもなく死去してい る。松香渓焼の始まるきっかけが長寿院であるとの巷説は「松香渓焼ノ件」でも否定される一 方、公卿の出であると特に説明されたためか、長寿院の存在が松香渓御茶屋設置の動機などと されたり(永竹1971)、松香渓焼の創始に関わったとの口碑を肯定するような誤解が生じている。 長寿院のお国入り前には松香渓近辺の「出火」や「不慮之儀」等の安全管理について近在の家 臣等にまで触が出されていること(宝永7年『小城藩日記』4月22日条)と併せると、火災 の危険があり職人なども出入りする登窯が御茶屋の至近に設けられることは考えにくい。

また、正徳6年(1716)6月11日に「松ケ渓御茶屋跡御山方付ニ相成」(傍点は筆者)とあり(「小城藩日記DB」3597)、享保4年(1719)11月18日には「同(松渓)御茶屋跡」を櫨蝋用の櫨の植林地とすることが認められている(「小城藩日記DB」4956)。つまり、長寿院死後に松香渓御茶屋は廃され、享保10年(1725)に「焼物山」が置かれた時にはすでに存在していなかったのであって、松香渓焼開窯の動機は御茶屋と直接の関係がないことは明らかである。

松香渓御茶屋が別邸として再び利用されるのは、松香渓窯の廃窯からしばらく経ってからで、 寛政6年(1794)4月19日、隠居した7代直愈が「松谷御茶屋」に移っているが(「小城藩日 記 DB」33365)、享和元年(1801)に直愈が流行り病で死去したために撤去され(岩松 1974, p. 326)、 短期間でその役目を終えている。

### (4) 史料にみる小城藩と焼物師・赤絵師

小城藩と焼物師や赤絵師に関する史料はさほど多くない。焼物師に関するものでは、元禄12 年(1699)に「皿山南川原焼物師松井兵右エ門」へ銀150匁を渡した記事(史料33)や同年「有 田焼物師酒井田藤九郎」へ銀子を渡した記事(史料34)、享保元年(1716)に参上した「焼物師 長峯藤次左衛門」に御酒が下され、献上があった記事(史料 37)がある。元禄 12 年の 2 件は有 田の焼物師、なかでも南川原や酒井田家との関係がわかり、従来は、これらの史料をもって有 田南川原から焼物師を召し呼んで松香渓窯で焼かせたと解釈されてきた。陶磁器注文の内容が 具体的にわかる例として、宝永4年(1707)の「やき師柿右ヱ門」への白磁と青磁香炉3件の 代銀支払いに関する記事があるが(史料35)13、これを有田の焼物師を小城に招いて作らせてい たと解釈するのは無理があり、この頃までは酒井田家を始めとする有田南川原の窯焼に外注し ていたとするのが自然である。松香渓の開窯後は小城鍋島家が「松渓皿山」の見物に出向いた り(史料7・25)、「松渓焼物細工人」を召し呼んで御覧になったとの記事(史料 31)もあるこ とからも、元禄・宝永期の焼物師に関する記事はやはり有田への注文を反映したものであろう。 赤絵師に関しては宝永5年(1708)の記事(史料36)のみで、小城藩から願い出た「赤絵師之義」 について「絵師共」が訴えたので叶わず、御用のある場合は「只今罷在者共」に仰せつけるよ うにとのことで、本藩の請役所からもそのつど仰せつけるように(聞役である水町)平馬に伝 えられた、という内容である。事の詳細はわからないが、少なくとも宝永5年の時点では小城 での色絵生産は行われていないことを示している。

### (5) 史料にみる小城鍋島家の陶磁器献上・贈与

小城鍋島家の陶磁器献上・贈与に関する記事は3代藩主元武の年譜で元禄11年(1698)から宝永4年(1707)までに集中している(史料38~50)。この頃、元武は江戸城の奥詰を務めており、5代将軍綱吉や側近等との関わりの中で頻繁に進上が行われたとみられる。柳沢吉保の屋敷が火事で全焼した時は見舞いとして「鱠皿百」を贈り(史料47)、綱吉が護持院や松平輝貞邸へ御成を行った際には、祝儀として皿を百・二百と贈っている(史料48・49)。

献上・贈与されたのは陶磁器そのものと容器としての陶磁器がある。種類は染付・錦手(色絵)・ 青磁で、器種は皿・角皿・鱠皿・猪口・大猪口・壺・徳利・獅子香炉・花瓶があり、壺は梅干・ 砂糖漬の容器、徳利は酢の容器である。江戸での献上・贈与に関するもので、すべて国元から 取り寄せたものと断定はできないが、壺や徳利の中身が「御在所之梅干」や「御国酢」である ことや、陶磁器そのものでも「御国焼」や「御在所焼」などと表記するものがあることから、 大部分は国元から調達したものと考えられる。問題はこうした陶磁器が松香渓焼である可能性 があるかという点である。元禄14年(1701)の梅干献上(史料39)では「右梅干壺、伊万里焼」 と記されているので松香渓焼でないことは明らかであり、元禄15年(1702)の「御国焼」(史 料46・47)や宝永2年(1705)の「御在所焼」(史料49)については小城領内の焼物と解釈す ることもできるが、先述したように宝永4年(1707)でも「やき師柿右ヱ門」へ外注している ことを踏まえると、やはり佐賀藩内の焼物という程度の意味とみるべきであろう。

### (6)「竹曲瓶焼」について

最後に史料検討の過程で新たに判明した小城の陶器生産について触れておきたい。

松香渓焼の関係史料として挙げた『日記目録』の享保 20 年(1735)の記事に「松渓皿山薪 并竹曲瓶焼薪御印事」とあり(史料 16)、松香渓皿山用薪と共に「竹曲瓶焼」用の薪が記され ている。これに先立つ同年の記事にも「山本和右衛門竹の曲瓶焼方并西川筋心遣被仰付候事」<sup>14</sup> があり(史料 15)、小城藩が松香渓皿山と共に「竹(の)曲瓶焼」を所管していることが確認 できる。「瓶焼」とあるので、壺・甕や擂鉢などを生産した陶器窯と推測され、元文 3 年(1738)・ 元文 5 年(1740)・寛保元年(1741)の記事(史料 20・23・27)にみえる「瓶山方」も、この 「竹の曲瓶焼方」と同じと考えられる。享保 20 年(1735)から寛保元年(1741)までの短期間 しか確認できず、具体的な内容は不明であるが、磁器窯である松香渓焼窯とは別に小城藩が 関わった陶器窯が実在したことは確かである。「竹曲」または「竹の曲」については、小城陣

屋・陣屋町の北方にあたる現在の小城市小城町平原地区西方の丘陵地南端付近に「たけまがり」なる通称地名が遺っており(古庄 2016)<sup>15</sup>、天保6年(1835)の『小城郡里四郷地図』(公益財団法人鍋島報效会所蔵)でも現在の通称「たけまがり」付近に「竹ノ曲」、その北側に続く丘陵部には「竹曲山」と記されており(図14)、このあたりのいずれかに陶器窯が築かれていたものと考えられる。今のところ陶器窯に関する遺構や遺物は何も確認されていないが、今後「竹曲瓶焼」窯跡の所在とその内容が明らかになることを期待したい。



図 14 小城郡里四郷地図(部分) 公益財団法人 鍋島報效会所蔵(小城市教育委員会 2019a から転載)

#### 5. おわりに

肥前佐賀藩の支藩である小城藩が享保 10 年(1725) に開窯した松香渓焼(松香渓窯) について、研究史を通して課題を抽出し、伝世品・出土資料と関係史料を検討して現状でわかることを考察した。松香渓焼に関する調査研究の今後の課題を挙げてまとめに替えたい。

#### ① 松香渓焼の識別と作例の抽出

松香渓焼の特徴については予察に留まり、明確化できていない。伝世品や消費地遺跡での出 土例から松香渓焼を抽出するためにも着眼点を増やし検証を重ねる必要がある。

#### ② 松香渓窯跡の調査

①の課題解決のためにも、基準となる確かな資料が必要である。将来的に松香渓焼窯跡の学 術的な発掘調査が実施されれば、生産地としての実態が明らかになるのではないだろうか。

#### ③ 原料の由来

磁器の原料をどこに求めたか、明確な根拠のない説や推測のみで実態が不明である。今後、 窯跡資料の胎土組成分析などにより原料に関する研究の進展が望まれる。

#### ④ 開窯の背景

松香渓焼は従来考えられていたように小城鍋島家の御庭焼のような在り方から藩の事業である皿山に移行したのではなく、当初から藩が主体的に関与して始まった磁器生産であるが、開 窯の背景・動機については何もわかっていない。小城藩内だけでなく佐賀藩全体や肥前地域まで含め同時代の動きの中で考えていかなければならない。

#### ⑤ 関係史料の探索

本稿で示したもの以外にも未翻刻の『小城藩日記』などに関係史料が埋もれている可能性がある。今後、新たな史料が掘り起こされて歴史的意義の解明につながることを期待したい。

### 謝辞

起稿にあたり、御協力・御教示いただいた下記の機関・各位に深く感謝申し上げます。 小城市教育委員会 小城市立歴史資料館 人間文化研究機構国文学研究資料館 見瀧寺宝地院 佐賀県文化課文化財保護室 佐賀大学附属図書館 公益財団法人鍋島報效会 太田正和 大橋康二 田久保佳寛 永田稲男 東中川忠美 古庄秀樹 村松洋介(敬称略 五十音順)

### 注

1 伝世品の銘には「松香焼」「松香谷皿山」、小城藩『日記目録』の記事では「松渓焼物」「松渓皿山」とある。また、宝永7年(1710)の『小城藩日記』では松香渓御茶屋に関して「松ヶ谷」「松ヶ渓」「松香渓」の表記が混在している(伊藤編 2020)。巷間に普及している「松ヶ谷」は、小城の松香渓焼とは関係のない製品が「松ヶ谷手」と俗称され誤解を招いてきたことから使用を避けるべきと考えるので、これと区別する意味でも「松香渓」を用いることとする。

- 2 原本は国文学研究資料館所蔵「肥前国小城鍋島家文書」にあり、『三日月町史』に全文が翻刻されている。
- 3 『陶器賛』の原本は所在を確認できないが、武富家と姻戚の佐野安麿から写しを提供された北村彌一郎が全文を紹介している(北村1902)。本稿の関連では「皎々瓷堊在白阪嶺松谷之隩始試焼燔 二地在小城郡」(白白しい磁器用の白土が白阪嶺にあり、松谷の奥で試焼を始めた。二つの地は小城郡にある)とする。
- 4 武富圯南『磁器七律詩書』(佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 竹田磋智夫氏寄贈:収蔵番号 03275) 七言律詩「詠磁器」の第1句「松谷初呈祥瑞才」に関し「採小城白坂之瓷堊創陶於松谷」(小城白坂の磁器用の白土を採り、松谷において磁器を創る)と記す。
- 5 後に、佐賀では少なくとも第二次大戦前の頃から松香渓の色絵とされてきたと説明(今泉1969)。
- 6 年代観を別にすれば、今泉も永竹もいわゆる「松ヶ谷手」が初期の色鍋島に関連するものと認識 している。
- 7 後述するように元禄・宝永期に小城鍋島家が献上・贈与した陶磁器を松香渓焼とする根拠はない。 磁器製の「釘隠し」については酒井田家が貞享2年(1685)頃に佐賀藩鍋島家から注文を受けた例 が知られており(酒井田2021)、元禄・宝永頃の小城鍋島家と酒井田家を始めとする南川原の焼物師 との関係を考えると、この「見事な釘かくしの焼物」は有田南川原への注文品であった可能性がある。
- 8 調査担当者であった東中川忠美氏の御教示による。
- 9 木下伝左衛門は、享保 10 年 (1725) に小城藩が「焼物山」を設置する際に高間玄可と共に心遣役を仰付けられ (後掲史料 1)、享保 12 年 (1727) から寛保 3 年 (1743) まで皿山方とみえるので (史料 10・20・28)、銘文の「木下氏」と同一人物である蓋然性は高い。
- 10 大橋康二氏の御教示による。
- 11 明治 43 年 (1910) に発足した小城藩史編纂会は、小城藩日記をはじめとする史料の収集などを行い、昭和 4 年 (1929) まで活動が確認されるという (野口 2019, pp.  $202 \sim 203$ )。
- 12 長寿院が初めて小城に下国したのは宝永7年(1710)であり、この箇所に関しては「支部扣書」で原本の誤認が訂正されている。
- 13 この史料の出典は「松香渓焼ノ件」として国文学研究資料館所蔵「肥前国小城鍋島家文書」に含まれている。判読に関して田久保佳寛氏に御教示いただいた。なお、小城鍋島文庫(佐賀大学附属図書館所蔵)の『宝永四亥 日記』(宝永4年小城藩日記)には該当する記事を確認できなかった。
- 14 「小城藩日記データベース」では「竹の曲瓶境方」となっていたが、佐賀大学附属図書館貴重書デジタルアーカイブ (https://www.dl. saga-u. ac. jp/collection/)の画像により「竹の曲瓶焼方」とした。
- 15 「たけまがり」の遺称地は古庄秀樹氏に御教示いただいた。

#### 引用・参考文献

- 伊藤昭弘(2017)「「小城藩日記データベース」について」『研究紀要』第 12 号 pp. 127 ~ 131 佐賀 大学地域学歴史文化研究センター
- 伊藤昭弘 編 (2020)「宝永七年「小城藩日記」」『小城藩日記の世界』 pp. 31 ~ 94 佐賀大学地域学歴 史文化研究センター
- 今泉元佑 (1957) 「松ケ谷色絵磁器に就て」『陶説』No. 50 pp. 9~13 日本陶磁協会
- 今泉元佑(1969)「第三編 肥前小城藩窯松ヶ谷の研究」『色鍋島と松ヶ谷』 pp. 299 ~ 302 雄山閣

岩松要輔 (1974)「近世」『小城町史』 pp. 203 ~ 348 小城町役場

太田保一郎(1934)「小城松ヶ谷焼に就て」『佐賀郷友』第6年第8号 pp. 5~8 佐賀郷友社

太田保一郎 (1935) 「三たび小城松ヶ谷焼に就て」 『佐賀郷友』 第7年第3号 pp. 14 ~ 15 佐賀郷友社

大西林五郎 編 (1913) 『鑑定備考 日本陶器全書』巻之四 松山堂

大橋康二 (1983) 「樋口窯出土陶片にみる「松」銘」『セラミック九州』No. 5 p. 4 佐賀県立九州陶 磁文化館

大橋康二 (1987) 「鍋島藩窯跡出土品にみる初期の鍋島」 『鍋島-藩窯から現代まで』 pp. 155 ~ 162 神奈川県立博物館

小城郡教育会 編(1934a)「松ヶ谷焼」『小城郡誌』 pp. 426 ~ 427 小城郡教育会

小城郡教育会 編(1934b)「松香渓焼之起源 鍋島子爵家記録寫」『小城郡誌』 pp.  $433 \sim 434$  小城郡教育会

小城市教育委員会(2010)『北小路遺跡 1 · 2 区 丁永遺跡 1 · 2 · 4 · 5 区』小城市文化財調査報告書第 9 集

小城市教育委員会(2019a)『小城陣屋跡2区』小城市文化財調査報告書第41集

小城市教育委員会(2019b)『小城市内遺跡9』小城市文化財調査報告書第42集

小城町教育委員会(1986)『岩蔵寺資料集』小城町文化財調査報告書第3集

北村彌一郎(1902)「雑報 陶器贊并引」『大日本窯業協会雑誌』第 10 巻第 118 号 pp.  $414 \sim 417$  大日本窯業協会)

黒川眞賴(1878)「松ヶ谷窯」『工藝志料』巻三

許斐友次郎(1935)「松ヶ谷焼(肥前小城)」『茶わん』第5巻第1号(通巻48号) pp.51~55 宝雲舎酒井田千明(2021)「『酒井田家文書』にみる御用注文について-貞享年間から正徳年間を中心に-」『中近世陶磁器の考古学』第十四巻 pp.97~127 雄山閣

佐賀県教育委員会(1985)『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第8集(1984年度)

佐賀県教育委員会(1986)『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第9集(1985年度)

佐賀県立九州陶磁文化館(2012)『古伊万里の文様集成』

佐賀県立九州陶磁文化館(2019)『柴田夫妻コレクション総目録(増補改訂)』

佐賀県立図書館編(2009)『佐賀県近世史料』第二編第一巻 佐賀県立図書館

佐賀県立図書館 編 (2011) 『佐賀県近世史料』 第二編第二巻 佐賀県立図書館

鈴田由紀夫(1995)「17世紀末から 19世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクションIV』 pp. 272  $\sim 279$  佐賀県立九州陶磁文化館

高木如水 (1900)「松ヶ谷焼」『鑑定秘訣 陶器類集』巻之二 青木嵩山堂

寺内信一 (1936)「松ヶ谷窯」『陶器大辞典』巻五 pp. 251 ~ 252 五月書房

陶器全集刊行会 編(1937)「松ヶ谷焼」『日本古陶銘款集 九州篇』 p. 132 平安堂書店

中島浩氣 (1936) 「肥前陶史外編 松ケ谷焼 南川原の工人 岩藏寺の香爐 紀伊守對古文書」 『肥前陶磁 史考』 pp. 65 ~ 68 肥前陶磁史考刊行會 (1985 年 青潮社復刻)

永田稲男 (2010)「松ヶ谷窯について」『北小路遺跡 1 ・ 2 区 丁永遺跡 1 ・ 2 ・ 4 ・ 5 区』小城市文 化財調査報告書第9集 pp. 121 ~ 124 小城市教育委員会

永竹威(1957)「小城藩窯 柿右衛門傍系 松ヶ谷焼について」『柿右衛門』 pp. 289 ~ 302 柿右衛門 調査委員会編 金華堂

永竹威(1971)「肥前磁器諸窯の潮流と特質 肥前有田磁器の系譜 (二) 柿右衛門の系譜 南川原傍 系 松香谷焼考」『陶器講座 3 日本Ⅲ』 pp. 292 ~ 295 雄山閣

永竹威(1974)「鍋島藩窯の変遷推移」『肥前陶磁の系譜』 pp. 317 ~ 320 名著出版

永竹威 (1975)「南川原傍系・松香谷焼についての考察」『九州の絵画と陶芸』 九州文化論集 5 pp. 433~ 434 平凡社

野口朋隆(2019)『小城藩』シリーズ藩物語 現代書館

東中川忠美 (1980)「窯跡からみた有田付近の磁器窯」『日本やきもの集成 11 九州 I 』 pp. 58・113 ~ 116 平凡社

古庄秀樹(2016)「小城のしこ名」『調査研究報告書』第9集 pp. 15 ~ 22 小城市立歴史資料館・小城市立中林梧竹記念館

馬渡八太郎 (1935)「再び肥前小城松ヶ谷焼に就て」『茶わん』第5巻第5号 (通巻52号) pp. 59  $\sim$  61 宝雲舎

### 史料

1 松香渓焼・竹曲瓶焼関係史料

**史料 1 日記目録九**(享保 10 年 6 月 14 日)(小城藩日記 DB9369 佐賀大学附属図書館蔵) 今般焼物山御取立ニ付心遣役木下伝左衛門高間玄可被仰付候事

**史料2** 日記目録九(享保 10 年 6 月 17 日)(小城藩日記 DB9375 佐賀大学附属図書館蔵) 焼物山付役前隈市左衛門被仰付候事

**史料3** 日記目録九(享保10年7月1日)(小城藩日記DB9392 佐賀大学附属図書館蔵) 皿山仕組事繁相成候付差次之事

**史料4** 日記目録九(享保 10 年 7 月 10 日)(小城藩日記 DB9406 佐賀大学附属図書館蔵) 御焼物山諸用材木御印之事

史料 5 日記目録九 (享保 11 年 2 月 28 日) (小城藩日記 DB9602 佐賀大学附属図書館蔵) 皿山方高間玄可御免之事

**史料6 日記目録九**(享保 11 年 3 月 30 日)(小城藩日記 DB9636 佐賀大学附属図書館蔵) 松渓焼物方前隈市左衛門溝口正右衛門被仰付候事

**史料7 日記目録九**(享保11年10月11日)(小城藩日記DB9821 佐賀大学附属図書館蔵) 松渓皿山為御見物御越之事

史料8 日記目録九 (享保 12 年 1 月 15 日) (小城藩日記 DB9958 佐賀大学附属図書館蔵) 相浦千兵衛義皿山役兼候様被仰付候事 **史料9 日記目録九**(享保 12 年閏 1 月 29 日)(小城藩日記 DB10009 佐賀大学附属図書館蔵) 修理方井桶方皿山用薪御印事

**史料 10** 日記目録九(享保 12 年 7 月 19 日)(小城藩日記 DB10213 佐賀大学附属図書館蔵) 松渓皿山方木下伝左衛門下付足軽事

**史料 11** 日記目録九 (享保 14 年 8 月 16 日) (小城藩日記 DB14245 佐賀大学附属図書館蔵) 飯盛助九皿山方右同断之事

史料 12 日記目録十(享保 15 年 6 月 18 日)(小城藩日記 DB11210 佐賀大学附属図書館蔵) 皿山御用材木御印之事

**史料 13** 日記目録十(享保 15 年 8 月 24 日)(小城藩日記 DB11689 佐賀大学附属図書館蔵) 田中与四右衛門皿山付役右同断之事

史料 14 日記目録十(享保 19 年 8 月 13 日)(小城藩日記 DB13633 佐賀大学附属図書館蔵) 高木忠右衛門皿山兼被仰付候事

**史料 15** 日記目録十一(享保 20 年 2 月 8 日)(小城藩日記 DB16365 佐賀大学附属図書館蔵) 山本和右衛門竹の曲瓶焼方并西川筋心遣被仰付候事

**史料 16** 日記目録十一(享保 20 年閏 3 月 13 日)(小城藩日記 DB16467 佐賀大学附属図書館蔵) 松渓皿山薪并竹曲瓶焼薪御印事

**史料 17** 日記目録十一(元文 2 年 12 月 30 日)(小城藩日記 DB17528 佐賀大学附属図書館蔵) 皿山善六・伊兵衛・庄左衛門同廿目右同断事

**史料 18 染付亀文大皿銘文**(元文 3 年 4 月)(宝地院伝世) 元文三歳戊四月 松香焼 木下氏書之

史料 19 日記目録十一(元文 3 年 8 月 28 日)(小城藩日記 DB17761 佐賀大学附属図書館蔵) 「核柳付銭) 石橋林右衛門瓶山方御山方右同断事

**史料 20 松香渓焼ノ件**(元文 3 年)(国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213) 諸役 人帳 ノ内

元文三年 木下伝左衛門

皿山付役目付兼 田中与四右衛門 瓶山方山方付兼 石橋林右衛門 史料 21 染付山水文大香炉銘文(元文4年9月吉目)(岩蔵寺伝世)

奉寄進天山宮 松香谷皿山 元文四歳未九月吉日

**史料 22** 日記目録十→(元文4年10月3日)(小城藩日記 DB18221 佐賀大学附属図書館蔵) 「被仰付儀) 陣内利右衛門皿山方右同断事

**史料 23** 日記目録十一(元文 5 年 1 月 13 日)(小城藩日記 DB18339 佐賀大学附属図書館蔵) 秀島吉右衛門御屋形御囲迄瓶山方被仰付候事

**史料 24** 日記目録十一(元文 5 年 8 月 15 日)(小城藩日記 DB18652 佐賀大学附属図書館蔵) 中園藤左衛門皿山方被仰付候事

史料 25 日記目録十一 (元文 5 年 10 月 10 日) (小城藩日記 DB18749 佐賀大学附属図書館蔵) 御前様其外御子様方皿山御見物として松渓御越之事

**史料 26** 日記目録十一(元文 5 年 12 月 1 日)(小城藩日記 DB18816 佐賀大学附属図書館蔵) 水田吉次郎松淫焼物方右同断事

**史料 27** 日記目録十一(寛保元年 8 月 24 日)(小城藩 日記 DB19140 佐賀大学附属図書館蔵) 石橋弥五右衛門瓶山方右同断事

**史料 28 松香渓焼ノ件** (寛保 3 年) (国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213) (諸役人帳ノ内)

寛保三年 皿山方 木下伝左衛門

**史料 29 松香渓焼ノ件**(延享元年 8 月 6 日)(国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213) (日記目録ノ内)

一延享元年八月六日伊東伝兵衛御蔵方皿山方被仰付候事

史料 30 松香溪焼ノ件(延享元年)(国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213)

(諸役人帳ノ内)

延享元年 全 伊東伝兵衛

全 付役 石橋弥左衛門

**史料31 松香渓焼ノ件**(延享2年5月13日)(国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号213) (日記目録ノ内)

一 仝 二年五月十三日松渓焼物細工人共被召呼御覧之事

史料 32 松香渓焼ノ件(延享4年)(国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号213)

(諸役人帳ノ内)

<sup>(延享)</sup> 仝 四年 皿山方兼勘定所役 鴨打清兵衛

### 2 焼物師・赤絵師関係史料

**史料 33** 松香渓焼ノ件 (元禄 12 年 4 月 6 日) (国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213) (日記目録ノ内)

一元禄十二年四月六日皿山南川原焼物師松井兵右工門へ銀百五十匁被相渡候事

**史料 34** 松香渓焼ノ件(元禄 12 年 8 月 25 日)(国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213) (日記目録ノ内)

- 全 八月廿五日有田焼物師酒井田藤九郎へ銀子被相渡候事

史料 35 松香渓焼ノ件(宝永4年)(国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号213)

宝永四年日記之内

- 一 白やき庭鳥香炉 一ツ
- 一 同犬之香炉 ーツ
- ー 青磁雁之香炉 ーツ

右代銀百十匁やき師柿右ヱ門渡り

書宣出ル四月廿二日二先頃之残り

の□内也

**史料 36** 松香渓焼ノ件(宝永 5 年 1 月)(国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213) (日記目録ノ内)

一宝永五年正月赤絵師之事

日記ノ内

去秋赤絵師之義被相願候得共絵師共重畳訴訟仕候ニ付而不被相叶由御用之節ハ何時モ只今罷在者共随分可被仰付之□佐嘉受役所ヨリモ其筋々被仰付へキ由平馬へ被仰聞候也

**史料 37** 日記目録七(享保元年 11 月 11 日)(小城藩日記 DB3988 佐賀大学附属図書館蔵) 焼物師長峯藤次左衛門参上御酒被下并献上之事

## 3 小城鍋島家(小城藩)の陶磁器献上・贈与関係史料

史料 38 元武公御年譜 (元禄 11 年 4 月 29 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一公儀二は近内 八重姫君様水戸中将様へ御入輿二付、御使者を以御祝物献上被成候付、御奉書

今度 八重姫君様御入輿二付、新制之陶器品ゝ進上之候、右之趣各申談及 高聴候、恐ゝ 謹言

四月廿九日 土屋相模守政直判 鍋嶋紀伊守殿

### 史料 39 元武公御年譜 (元禄 14 年 10 月 25 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一今日、如例年、御在所之梅干御献上、 御目録大高檀紙堅紙

進上

梅干 一壺

以上 鍋嶋紀伊守

直頼

右梅干壺、伊万里焼外家之箱有右御残り一壺ツ、被進候御方様

柳沢出羽様 小笠原佐渡守様

松平右京大夫様 土屋相模守様

阿部豊後様 秋元但馬守様

護持院大僧正様 稲葉丹後守様

稲垣對馬守様 右之外十八人様有、御名略

外二藪田五郎右衛門始六人有

### 史料 40 元武公御年譜 (元禄 14 年 11 月 9 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一同月九日、昨夜御能被召呼候惣役者中へ被下物

✓ 白銀五枚 金剛大夫 白銀壱枚 貞光安兵衛 梅干一壺

(後略)

### 史料 41 元武公御年譜 (元禄 14 年 11 月 21 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一同月廿一日、今日御用二付、辰上刻御登 城

染付皿 三十入一箱 平野源左衛門へ為御見廻被遣候 同猪口 二十入一箱

(後略)

### 史料 42 元武公御年譜 (元禄 14 年 11 月 24 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一錦手皿 十入一箱 同大猪口 十入一箱 右は井野了悦、御所望被申上候付被下候

### 史料 43 元武公御年譜 (元禄 14 年 11 月 27 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一十一月廿七日、志村近五郎様へ御国酢一徳利被進候、是ハ御約束也、松井喜左衛門へ右同断、

青磁獅子香炉一、鈴木宗珎へ御約束故也

史料 44 元武公御年譜 (元禄 14 年 11 月 28 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一同月廿八日、御礼日二付、辰中刻御登 城 青磁角皿 十入 一箱、錦手鱠皿 十入 一箱、跡部与市郎様へ御約束故被進候

史料 45 元武公御年譜 (元禄 14 年 11 月 29 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一同月廿九日、御当番二付、辰中刻御登 城 (中略)

一承教寺へ此間楽器御借り被成候御礼

砂糖漬 一壺

梅干 一壺

(後略)

史料 46 元武公御年譜 (元禄 15 年 1 月 25 日) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一同月廿五日、護持院へ 御成、兼而御所望ニ付、御国焼青磁之花瓶三ツ被進候

史料 47 元武公御年譜 (元禄 15 年 3 月) (『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一前三月五日之夜、美濃守様御屋敷出火、大形不残消失、(中略) 右二付、美濃守様へ為御見廻、御国焼鱠皿 百 最前被進、其後畳表五百枚被進之 (後略)

史料 48 元武公御年譜(宝永 2 年 1 月 25 日)(『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一同廿五日、護持院江 御成、例八御香炉被進候得共、皿百被進候

史料 49 元武公御年譜(宝永 2 年 2 月 9 日)(『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一同九日、右京大夫様江 御成、御在所焼皿 二百·干鯛一箱被進候

史料 50 元武公御年譜(宝永 4 年 11 月 2 日)(『佐賀県近世史料』第二編第二巻)

一十一月二日、大嶋肥前守様、西御丸御留守居被仰出候付、一種三百疋、土屋相模守様御伯父 様御仕合二付、砂糖漬一壺被進候

### 参考史料「松香渓焼ノ件」

松香渓焼ノ件(人間文化研究機構 国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213-1)

### 第三名物壱号 松香溪焼ノ件

松香溪焼之起源旧記欠本多ク又口碑ノ如キモ区々ニシテ詳細ヲ知ルニ由ナシト雖松香溪別墅ノ建築ト時代ヲ同スルハ想像ニ難カラス然ルニ別墅ノ建築ハ天和年間ニシテ小城藩二代ノ祖加賀守直

能ノ世ニ当レリ其記録ニ散見スルハ元禄宝永(三代紀伊守元武ノ治世)以降ニ属シ当時ハ所謂御庭焼ト称フル内事業ナリシガ下テ享保十一年ニ至之ヲ藩ノ事業ニ移シ皿山方ト云ヘル役目ヲ置キ延享二年六代直員治世ノ始マテ約八十余年間継続シタルモノ、如シロ碑ニ二代直能ノ夫人長壽院(小川坊城大納言俊完卿ノ息女実ハ後陽成院第八皇子良純親王ノ姫宮)正徳二年江戸ヨリ下国松香溪へ居住アリ娯楽ノ為製陶アリシトノ伝説アルモ既ニ其以前ニ於テ開窯アリシコトハ之ヲ旧記ニ徴スルモ明ナレバ同時代ヲ以最殷盛ヲ極メタル時ナリト認ルヲ適当ト信ス陶土ノ如キハ何地ニ之ヲ求メシヤ記録ノ徴スヘキナキヲ遺憾トス画工職工ハ有田ヨリ召抱ヘシハ記録ニ依ルモ又画風ニ見ルモ疑問ヲ挟ムノ余地ナカルヘシ尚右ニ関スル記録ノ抜萃ハ別紙ニアリ

### 日記目録ノ内

### 三代紀伊守元武代

一元禄十二年四月六日皿山南川原焼物師松井兵右工門へ銀百五十匁被相渡候事

#### 仝

一仝八月廿五日有田焼物師酒井田藤九郎へ銀子被相渡候事

#### 수.

一元禄十七年九月九日松溪御茶屋番山田善右工門渡御加勢銀之事

#### 仝

一宝永五年正月赤絵師之事

#### 日記ノ内

去秋赤絵師之義被相願候得共絵師共重畳訴訟仕候ニ付而不被相叶由御用之節ハ何時モ只 今罷在者共随分可被仰付之□佐嘉受役所ヨリモ其筋々被仰付へキ由平馬へ被仰聞候也

### 五代加賀守直英代

一正徳六年六月十一日松溪御茶屋跡御山方付ニ相成比丘尼寺モ右之内ニ入候事

#### 仝

一仝十一月十一日焼物師長峯藤次左工門参上御酒被下并献上之事

#### 仝

一享保十一年三月卅日松溪焼物方前隈市左工門溝口正右工門被仰付候事

#### 仝

一仝十月十一日松溪皿山為御見物御越之事

#### 仝

一仝十二年正月十五日相浦千兵衛皿山役兼候儀被仰付候事

#### 仝

一仝七月十九日松溪皿山方木下傳左工門下付足軽之事

#### 仝

一仝十五年皿山御用材木御印之事

#### 仝

一延享元年八月六日伊東傳兵衛御蔵方皿山方被仰付候事

### 六代紀伊守直員代

一仝二年五月十三日松溪焼物細工人共被召呼御覧之事

### 御年譜ノ内

- 一宝永二年二月九日右京太夫様御成御在所焼皿二百干鯛一箱被進候
- 一元禄十四年十一月錦手皿十入一箱同大猪口十入一箱右八井野了悦御所望被申上候二付被下候

諸役人帳ノ内

元文三年 木下傳左衛門

皿山付役

目付兼 田中輿四右衛門

瓶山方

山方付兼 石橋林右衛門

 寛保三年
 皿山方
 木下傳左衛門

 延享元年
 全
 伊東傳兵衛

全付役 石橋弥左衛門

全四年 皿山方兼

勘定所役 鴨打清兵衛

松香溪焼ト称スルモノ、中ニテ紛レナキモノハ現今発見之岩蔵寺所有白磁大香炉清水倉永氏所 蔵之白磁之大鉢ナレ共元文時代之製作ニテ精巧之物ニ非ス

岩蔵寺之香炉ハ径壱尺位鼎形ニシテ白磁ニ山水之染付ナリ裏ニ左之通リ記載アリテ文字亦染 付也

奉

天山宮 松香谷皿山 寄 元文四歳 進 未九月吉日

倉永氏之鉢ハ径壱尺四五寸円形之白磁ニシテ中ニ亀之染付アリ底ニ印形ニ左之通リ記載アリ 枠并文字皆染付ナリ

元文三歳 戊午四月 松香焼 木下氏書之

松香溪焼ノ件(人間文化研究機構 国文学研究資料館蔵「肥前国小城鍋島家文書」史料番号 213-2)

### 第三名物弐号御日記ノ内 松香溪焼ノ件 壱枚

宝永四年日記之内 但是号以前無之

一 白やき庭鳥香炉 一ツ

一 同犬之香炉 ーツ

一 青磁雁之香炉 ーツ

右代銀百十匁やき師柿右ヱ門渡り

書宣出ル四月廿二日二先頃之残り

の一内也

# 柴田夫妻コレクションにみる銘款集成3 - 元禄様式の時代 -

宮木 貴史

### 1. はじめに

肥前磁器の皿や碗などの裏には、「大明成化年製」や「福」といった文字やマークのようなものが染付や色絵で描かれていることがあり、一般に銘や銘款、底裏銘などと呼ばれる。これらの銘は中国磁器の影響を受けているが、中国磁器にあるものからさらに転化したもの、肥前磁器独自のものなど多様な銘がみられる。

佐賀県立九州陶磁文化館が所蔵する柴田夫妻コレクションは肥前磁器を中心とした一大コレクションである。全体で4,332 件10,311 点を数え、体系的な収集によって、江戸時代から幕末明治にかけての肥前磁器の変遷をみることができる。コレクションの4割にあたる約1800件に銘が施されており、筆者は江戸時代から幕末明治における肥前磁器銘の基礎資料を作成することを目的としてこのコレクションにみられる銘を集成、分類を行っている(宮木2021、2022)。年代などの資料の基本データは大橋康二氏が監修した『柴田夫妻コレクション総目録(増補改訂)』(九陶2019)を参照する。

柿右衛門様式に代表される白く形が端正な素地に、非対称で絵画的な構図で繊細な絵付けを特徴とする様式を延宝年間(1673~1683年)に成立するとして延宝様式と称している。その後、元禄年間(1688~1704年)には染付に色絵を付け、さらに金彩を施して絢爛豪華に装飾する金襴手と呼ばれる様式が成立する。また、絵画的構図が特徴だった延宝様式に対し、細かな地文様や画一化された文様、コンニャク印判と型紙摺といった印刷手法を用いたデザインが多くなる。金襴手様式を代表とし、元禄以降顕著となるこれらの特徴を持つものを元禄様式と称し、この元禄様式が成立し一般化する17世紀末から18世紀前半までの948件のうち銘のある465件を集成、銘の分類を行う。

#### 2. 銘の分類

肥前磁器の高台内に記される銘を大きく7つに分類し細分類を行う。すなわち、(A) 中国の国・年号及びその転化、(B) 吉祥語、(C) 合字・異体字・不明字、(D) 昆虫や草花等のマーク、(E) 生産地・生産者を表したもの、(F) 和暦、(G) その他、である。以下、分類ごとに年代順で紹介するが、細分類の数字はこれまでの論考からの通し番号を付している。なお、文末の() 内は該当する作品の図版番号であり、図版として「柴田夫妻コレクション肥前磁器銘一覧③」を付した。

#### A:中国の国・年号及びその転化

**A 3**:「大明成化年製」 中国磁器銘に倣ったもので、江戸時代を通じて使用された。中国の明 王朝の年号「成化」(1465  $\sim$  1487 年) を表す。1630 年代から引き続き使用される。「大」と「太」 の表記ゆれは継続するものの全体的には安定して描かれており、これから転じた「大明成」や 「化年製」はみられない。(001、002 他)

A 6:「大明嘉靖年製」 中国明王朝の「嘉靖」(1522 ~ 1566 年) を表すもので、1650 年代から引き続きみられ数も増えている。(074、086 他)

A17: 「大明年製」 中国明王朝を表す年号銘。1660 ~ 1670 年代から引き続きみられ、小皿や 手塩皿に特に多い。(068、079 他)

A22:「嘉靖年製」 中国磁器銘にもあり、「大明嘉靖年製」から国号を省略したもの。個数は少ないが A 6 と共に増加傾向にある。(006、015 他)

**A23**:「大明化製」「大明年製」の「年」が「化」となったもの。A17 と同様手塩皿に多い。(120、121 他)

A24:「大明萬曆年製」 中国明王朝の「萬曆」(1573~1619年) を表す。この年代に急激に数を増し、代表的な銘の一つとなる。中国磁器において嘉靖や萬曆頃に作られた色絵製品をモデルとして、肥前の金襴手様式が成立するが、この銘や A 6 「大明嘉靖年製」がこの時期に増加するのも中国磁器の模倣を再度意図したことを意味するものと考えられる。(042、051 他)

**A27**: 「大明永樂年製」 中国明王朝の「永樂」(1403  $\sim$  1424) 年) を表す 2 行 6 字銘だが、中国磁器には専ら「永楽年製」の 2 行 4 字銘が多く、清王朝期に 2 行 6 字銘を施した例があるようだ (朱 2018)。(085、302)

A28:「太明成化」「大明成化年製」から「年製」を省略したもの。中国磁器にもみられるようだが、柴田夫妻コレクションの2点はどちらも小皿、手塩皿であり高台が狭いために省略したか。(323、401)

A29:「大明成徳年製」「大明成化年製」の「大明成」と「大明宣徳年製」の「徳年製」を組み合わせたと考えられる。(334)

A30:「成化年製」 中国明王朝の「成化」を表すもの。意外にも 18 世紀になって表れる銘であるが、中国磁器でも清朝期にこの銘があることから清朝磁器に倣って施したか。(432、433 他)

### B: 吉祥語

B1:「福」「福」の篆書体を銘としたものは肥前磁器銘の中でも早くから現れる。示偏に「畐」が旁となっているとみられるものを B1 としている。数は減らしているものの引き続き使用される。(203、247 他)

**B2**:「福(草書)」「福」の草書体でB6より崩れた書体のもの。183の1点のみ。

B4:「壽」 吉祥の文字として銘に描く。(249)

B 5:「寶」 宝の旧字体を描いた銘。(337)

**B6**:「福(渦福)」 二重角枠に入り「田」の部分を渦状に描く、いわゆる渦福と呼ばれる銘。 144件と銘全体で最も多く、B6とA3で約半数を占める。(005、010 他)

B7:「福ヵ」 福の変化銘。114のみ。

B8:「富貴長春」 中国磁器にもある吉祥の文句。財も身分もある人生の春が長く続くことを 祈念するような意味か。「冨」と「富」の2種類あるが「冨」の方が多い。また、二行で表す 場合と十字に配する場合がある。(047、055 他)

B9:「奇玉宝鼎之珍」 器を賛辞する吉祥の文句。貴重な玉、宝のような鼎のように珍しい良い物であるという意味か。中国磁器でも清朝の民間磁器にあるようだが(童 1984)、実例はみない。430は「鼎」が「亭」になっている。肥前磁器では18世紀以降よくみられるようになる。(084、335 他)

B10:「球琳珍玩」 中国磁器にも見られる器を賛辞する吉祥の文句。球のように欠けたところのない美しく珍しい物の意味か。106の1点のみ。

B11:「永保長春」 中国磁器にもある吉祥の文句。長く春を保つことを祈念する意味か。199 のみ。

B12:「苴(益)友珍玩」 最初の文字が「苴」や「夏」のように見えるが「益友珍玩」を意図 したものだろう。「益友珍玩」は中国磁器にも見られる器を賛辞する吉祥の文句であり、良き 友のように貴重なものという意味か。(226、229A)

B13:「貴友珍玩」 中国磁器にはないが、「益友珍玩」を受けてのものか。(227)

B14:「萬作?侗月(萬福倣同ヵ)」 判読不明だが、中国磁器に多い「萬福倣同」の影響か。(228)

B15:「長命冨貴」 中国磁器に多い吉祥の文句。長寿や富を祈念する意味か。二行で表す場合と十字に配する場合がある。(343、345 他)

B16:「奇玉珍宝」 器を賛辞する吉祥の文句。中国磁器には確認できない。(356)

B17:「球珞珍玩」 中国磁器にはないが、「球琳珍玩」を受けてのものと考えられる。(374))

### C: 合字·異体字·不明字

**C 1**:「示+朱」「朱」の篆書体と「示」の篆書体を組み合わせと考えられる。18 世紀まで残った例、若しくは古陶磁に倣って施したものか。(035、224)

**C49**:「不明字 37」 字体から「古へ人」等と読まれてきた延宝様式の時代を特徴づける銘だが 18 世紀にも僅かに残る。(007、030 他)

**C50**:「金ヵ」「金」の篆書体に似る銘。延宝様式の時代に特徴的な銘だが、18 世紀にも僅かに 残る。(009、036 他)

**C53**:「不明字 39」 偏に「斤」のような文字を、旁に車輪のような文字を入れた銘。C49、C50 などとともに延宝様式の時代に特徴的な銘。024 の 1 点のみ。

C55:「朱+不明字41」「朱」の篆書体を偏に、「弓」に「目」を合わせたような文字を旁に入れた銘。 銘の描き方も特殊で、表の文様と同様に型紙摺を用いている。017の1点のみ。

C56:「不明字 42」「廉」を左右反転させたような判読不明の文字。このような文字は器体の文様としてもみられる。(078)

C57:「不明字 43」 判読不明。「朱」の篆書体から真ん中の横棒を省略したような形態で、「木」の篆書体に近い。文字というよりマークにもみえるが、文様として使用される例もある(収蔵番号:01869)。(179)

C58:「不明字 44」判読不明の文字。この銘を持つ2点とも碗で外面を木瓜形の窓で区切り、椿や獅子牡丹を描くという共通性がある。また、佐賀県立九州陶磁文化館が所蔵する柴澤コレクションには形態が似た銘を持ち火頭窓風の窓で区切った中に獅子牡丹を配した例がある(収蔵番号:14310)。(210、342)

**C59**:「不明字 45」 判読不明の文字だが、樋口窯出土陶片に円形枠に C 1 を飾り文字にしたような例があり、これの「示」の部分に似ている(九陶 2012)。325 の 1 点のみ。

**C60**:「不明字 46」 方形枠内を縦に中央で区切り、左には縦棒を 2本、右には人のような線を入れる。そこに横棒を 10 本弱配置するが、上から 5 本程度は真ん中で途切れている。印章のようでもあるが、何を表したものなのか判然としない。18 世紀になって出現し、数を増やしていく。(375、377 他)

**C61**:「不明字 47」 方形枠内を縦に中央で区切る C60 と似た形態だが、左は山を右に倒したような文字、右は春のように見える文字を配する。C60 と原形を同じくするものか、C60 から転化したものかは分からない。(403)

#### D: 昆虫や草花等のマーク

**D1**:「丁子」「丁子」とはクローブのことであり、貴重な薬用や香料として宝文の一つに数 えられ、器体の文様にも用いられる。(082)

**D2**:「丁子花」 丁子文に葉をつけ、草花のようにみえるもの。D1、D2の丁子銘は俗に大根文、 大根銘として紹介されている(中島 1955、水町 1959)。丁子を中心に置きその頂部から三方 と丁子の下部に葉をつけた形態で、D5のような草花文に近い形態をしている。中国磁器には 草花文や丁子と形態的に近い霊芝文もみられるが、直接的なモデルはない。染付銘、色絵銘な どいくつかのバリエーションがみられ、特に染付銘のものはその成立に柿右衛門窯の関与が指摘されている (大橋 2014、2016)。(091、156 他)

**D3**:「菊花文」  $12 \sim 16$  弁の花びらを持つ菊花文をマークとしたもの。染付と色絵を組み合わせものや、金彩を施したものもみられる。(110、248 他)

**D4**:「葉」 木の葉の形をしたマーク。212 以外は葉脈が主脈から側脈まで描写されている。 (152、153 他)

**D5**:「草花」 器体の文様にもあるような草花を描いたマーク。同じような銘は中国磁器にも みられる。267の1点のみ。

**D6**:「花」 器体の文様にもあるような花を描いたマーク。 2点あるいずれも色絵だが、270 は赤絵のみで 459 はそこに金彩を施している。270 と同じ銘が柴澤コレクションにもあり(収 蔵番号 14320)、どちらも輸出向けのカップアンドソーサーである。(270、459)

**D7**:「折枝花」 折枝の表現があるものを D7としたが、この銘のある 271 と 357 では形態が 異なる。271 は D2や D5の表現に近い。(271、357)

D8:「桃」 長寿や破邪を象徴する桃の実を描いたもの。中国磁器にもみられる。319 の1点のみ。

D9:「鷺」 水辺に佇む鷺を描いたもの。この銘のある3点はいずれも鷺、草、水面の表現が 共通し、器体は素焼き程度の低下度焼成に色絵を施した軟質施釉陶器である。(387、397 他)

#### F:和暦

F3:「甲子」 甲子(きのえね)とは干支の組み合わせの一つ。干支の年号を銘に入れる例は 中国磁器にもあるが、干支は日本でも使用しているため和暦に分類した。ただし、中国磁器や 他の和暦銘のように「年製」がつかないため、年号を意図したものかは不明。(004)

F4:「元亀年製」「元亀」とは日本の元号の一つであり1570~1573年に当たるが、この時代に磁器生産は行っていないため制作年代より古い年号を入れたことになる。中国磁器では古い年号を入れる場合が多くあるが、肥前磁器で何を意図して元亀を使用したかは不明である。(278)

**F5**:「元禄歳製」「元禄」とは日本の元号の一つであり 1688 ~ 1704 年に当たる。(400)

**F 6**:「享保壬寅」「享保」とは日本の元号の一つであり 1716  $\sim$  1736 年に当たる。壬寅(みずのえとら)とは干支の組み合わせの一つのため、つまり享保年間の壬寅年とは 1722 年(享保 7)のことである。(425)

### G: その他

G 2:「寛永通宝」 寛永通宝は日本の銭貨の一つであり、四角を中心に十字に配する形態はまさに銭貨の姿を示している。銭形の装飾は磁器以外にも文様としてあるが、中国磁器では富貴 長春や長命富貴などの吉祥語を十字配置にすることがあり、肥前磁器にも 075B や 345 などの 例があることから、銘としてはこれらの影響を受けて施されたと考えられる。(075A)

G3:「鵬」「鵬」と読めるが、この文字を使用した意図は判然としない。(368)

### 3. 銘の消長と器種

柴田夫妻コレクションにみられる銘のうち 17 世紀末から 18 世紀前半では、前の年代から 出現したものを含め 52 種類の銘を確認した。この 52 種類の変遷を表 1 にまとめる。

延宝様式の時代からの大きな変化は、C類の減少に対するB類の増加及びD類の出現である。肥前磁器のオリジナルであるC49( 配)、C50( 金)、C53( 配) が数を減少させ、中国磁器にあるB8「富貴長春」やB15「長命富貴」などの吉祥語、D類に分類するマークが出現したことは、中国が1684年に海禁政策を解除したことで磁器の輸出が再開されたことの影響と、日本の磁器需要における中国志向の強さを示している。ただし、多くはA3「大明成化年製」とB6「福(渦福)」という典型的な銘を使用しているため、画一化の流れは変わらない。52種類の銘のうち、件数が20件以上あるものは、A3「大明成化年製」、A17「大明年製」、A24「大明萬曆年製」、B6「福(渦福)」、B8「富貴長春」の5種類であり、17世紀末から18世紀前半における主要銘と言える。この5種類にC49( 配)、C50( 金)、C53( 配) を加えて1670年代からの量的な推移をグラフにしたものがグラフ1であり、上は数量差を示し、下は割合を視認しやすい100%積み上げ棒グラフにしている。

A類ではA3(大明成化年製)を主体としてA6(大明嘉靖年製)、A17(大明年製)、A24(大明萬曆年製)に絞られてくる。「大」と「太」、「靖」と「清」などの表記ゆれは依然としてあるものの、全く違う文字が入ることや一文字抜き出したような銘はなくなってきた。グラフ1からもA3は対象年代を通して一定した割合で使用がみられ、1690年代以降になるとA17にも一定量の使用が認められるようになる。そこにA24の出現及び増加がみられる。A24はほぼ色絵製品の皿か鉢に使用されており、鉢への使用は銘の中で最も多い。

B類は、吉祥の文字としての「福」がほとんどだった段階から、B8「富貴長春」やB9「奇玉宝鼎之珍」等の中国磁器に倣った吉祥語銘が一気に増えた。しかし圧倒的多数を占めるものはB6であり、A3同様対象年代を通して安定した使用が認められる。ただし、延宝様式の時代に定型化した形態が18世紀の中で次第に粗雑化していく様もみられるようになる。吉祥語の銘は中国磁器に倣ったものがほとんどだが、B16「奇玉珍宝」やB17「球珞珍玩」のように

# 表 1 柴田夫妻コレクションにみられる銘の消長(17世紀末~18世紀前半)

A6	分類	1680	1690	1700	1710	1720	1730	1740	1750	銘	件数
A17       太明年製       26         A23       本明化製       4         A24       大明高曆年製       36         A27       大明永樂年製       2         A28       太明成化       2         A29       太明成佬年製       4         A30       成化年製       4         B1       福       1         B2       有(編書)       1         B4       壽壽       1         B5       資       1         B6       有(編書)       14         B7       最       五貴長春       4         B8       奇       奇玉東野珍       5         B10       東洋野野野       東       香玉野       1         B12       直(益)       五貴年       1         B13       大明成衛門?       1       1       1       1       1       1       1       1       1       1       1       1       1       1	A3									大明成化年製	96
A17	A6									大明嘉靖年製	17
A22	A17										26
大明本記   大明本記	A22										4
大明											4
大明永樂年製											36
A28											2
大明成徳年製											2
R30										ļ.	1
B1										II.	4
B2											
B4     B5       B5     質       B6     福海       B7     福海       B8     富貴長春       B9     奇玉宝県之珍       B10     球球珍玩       B11     永保長春       B12     直(益)友珍玩       B13     責佐字月(萬福傲同?)       B14     萬作字月(萬福傲同?)       B15     長命富貴       B16     奇玉珍宝       B17     味給珍玩       C1     朱・示       C49     不明字37(古人)       C50     金カ       C53     不明字39       C55     朱・不明字41       C56     不明字42       C57     不明字43       C58     不明字44       C59     不明字45       C60     不明字45       C61     不明字47       D1     丁子       D2     丁子花       D3     菊花文       D4     東で一ク       D5     草花マーク       D6     花マーク       D7     折花文       D8     快で一ク       D9     質子       F3     甲子       F4     元金年製       F5     元禄教記       万株數     東京王貴       F6     草保王貴       G2     寛永運											1
B5											
B6										<u> </u>	
B7		<u> </u>									1 1
■ 88											
B9											1
B10											
B11											9
B12       直(益)友珍玩         B13       黄友珍玩         B14       萬作?月(萬福做同?)         B15       長命富貴         B16       新玉珍宝         B17       珠路珍玩         C1       朱+示         C49       不明字37 (古人)         C50       金カ         C53       不明字39         C55       朱+不明字41         C56       不明字42         C57       不明字43         C58       不明字44         C59       不明字45         C60       不明字46         C61       不明字47         D1       丁子花         D2       丁子花         D3       菊花文         D4       葉マーク         D5       草花マーク         D6       花マーク         D7       折花文         D8       桃マーク         D9       麓         F3       甲子         F4       元亀年製         F5       元祿藏製         F6       享保壬寅         62       寛永通宝(十字)											1
B13       貴友珍玩         B14       萬作?月(萬福倣同?)         B15       長命富貴         B16       奇玉珍宝         B17       球路珍玩         C1       朱+示         C49       不明字 37 (古人)         C50       金カ         C53       不明字 39         C55       朱+不明字 41         C56       不明字 42         C57       不明字 43         C58       不明字 44         C59       不明字 45         C60       不明字 46         C61       不明字 47         D1       丁子花         D2       丁子花         D3       菊花文         D4       葉マーク         D5       草花マーク         D6       花マーク         D7       折花文         D8       桃マーク         D9       鷺         F3       甲子         F4       元編練製         F5       元禄練製         F6       享保壬寅         62       寛永通宝(十字)										ļ	1
B14       萬作?月(萬福倣同?)         B15       長命富貴         B16       奇玉珍宝         B17       球路珍玩         C1       朱 + 示         C49       不明字 37 (古人)         C50       金 カ         C53       不明字 39         C55       朱 + 不明字 41         C56       不明字 42         C57       不明字 43         C58       不明字 45         C60       不明字 46         C61       不明字 47         D1       丁子花         D2       丁子花         D3       菊花文         D4       菜マーク         D5       草花マーク         D6       花マーク         D7       折花文         D8       桃マーク         D9       鷺         F3       田子         F4       元亀年製         F5       元未練製         F6       夏永通宝(十字)	B12									苴(益)友珍玩	1
B15       長命富貴       3         B16       高玉珍宝       1         B17       球路珍玩       1         C1       朱+示       2         C50       金力       3         C50       金力       3         C53       不明字 39       4         C55       朱+不明字 41       1         C56       不明字 42       1         C57       不明字 43       1         C58       不明字 44       2         C59       不明字 45       1         C60       不明字 47       1         D1       丁子花       1         D2       丁子花       5         D3       菊花文       4         D4       葉マーク       6         D5       草花マーク       1         D6       花マーク       1         D7       折花文       2         D8       株マーク       1         D9       鷺       第         F3       甲子       元亀年製         F4       元亀年製       1         F6       享保壬寅       京永通宝       1         G2       寛永通宝       1	B13									貴友珍玩	1
B16	B14									萬作?月(萬福倣同?)	1
B17	B15									長命冨貴	3
C1       集+示       2         C49       不明字 37 (古人)       5         C50       金カ       3         C53       不明字 39       1         C55       集+不明字 41       1         C56       不明字 42       1         C57       不明字 43       1         C58       不明字 44       2         C59       不明字 45       6         C60       不明字 46       7         C61       不明字 47       1         D1       丁子       1         D2       丁子花       5         D3       菊花文       4         D4       葉マーク       6         D5       草花マーク       1         D6       花マーク       2         D7       折花文       2         D8       株マーク       1         D9       意       意         F3       甲子       1         F4       元亀年製       1         F6       享保壬寅       寛永通宝(十字)	B16									奇玉珍宝	1
C49       不明字 37 (古人)       5         C50       金カ       3         C53       不明字 39       1         C55       集 + 不明字 41       1         C56       不明字 42       1         C57       不明字 43       1         C58       不明字 44       2         C59       不明字 45       1         C60       不明字 47       1         D1       丁子花       5         D2       丁子花       5         D3       菊花文       4         D4       葉マーク       6         D5       草花マーク       2         D6       花マーク       2         D7       が花文       2         D8       様々一ク       1         D9       鷺       電         F3       甲子       1         F4       元亀年製       1         F5       元禄歳製       1         F6       享保壬寅       寛永通宝(十字)	B17									球珞珍玩	1
C49       不明字 37 (古人)       5         C50       金カ       3         C53       不明字 39       1         C55       集 + 不明字 41       1         C56       不明字 42       1         C57       不明字 43       1         C58       不明字 44       2         C59       不明字 45       1         C60       不明字 47       1         D1       丁子花       5         D2       丁子花       5         D3       菊花文       4         D4       葉マーク       6         D5       草花マーク       2         D6       花マーク       2         D7       が花文       2         D8       様々一ク       1         D9       鷺       電         F3       甲子       1         F4       元亀年製       1         F5       元禄歳製       1         F6       享保壬寅       寛永通宝(十字)	C1									朱 + 示	2
C50     金カ       C53     不明字 39       C55     集 + 不明字 41       C56     不明字 42       C57     不明字 43       C58     不明字 44       C59     不明字 45       C60     不明字 47       D1     丁子       D2     丁子花       D3     菊花文       D4     葉マーク       D5     草花マーク       D6     花マーク       D7     折花文       D8     桃マーク       D9     鷺       F3     甲子       F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       夏永通宝(十字)	C49									不明字 37 (古人)	5
C53       不明字 39         C55       朱 + 不明字 41         C56       不明字 42         C57       不明字 43         C58       不明字 44         C59       不明字 45         C60       不明字 47         D1       丁子         D2       丁子花         D3       菊花文         D4       葉マーク         D5       草花マーク         D6       花マーク         D7       折花文         D8       桃マーク         D9       鷺         F3       甲子         F4       元亀年製         F5       元禄歳製         F6       享保壬寅         G2       寛永通宝 (十字)	C50										3
C55       集+不明字 41         C56       不明字 42         C57       不明字 43         C58       不明字 44         C59       不明字 45         C60       不明字 46         C61       不明字 47         D1       丁子         D2       丁子花         D3       菊花文         D4       葉マーク         D5       草花マーク         D6       花マーク         D7       折花文         D8       桃マーク         D9       鷺         F3       甲子         F4       元亀年製         F5       元禄歳製         F6       享保壬寅         G2       寛永通宝(十字)											1
C56       不明字 42       1         C57       不明字 43       1         C58       不明字 44       2         C59       不明字 45       1         C60       不明字 46       7         C61       不明字 47       1         D1       丁子       1         D2       丁子花       5         D3       菊花文       4         D4       葉マーク       6         D5       草花マーク       1         D6       花マーク       2         D7       折花文       2         D8       株マーク       1         D9       鷺       鷺         F3       甲子       1         F4       元亀年製       1         F5       元禄歳製       1         F6       享保壬寅       寛永通宝(十字)											1
C57       不明字 43       1         C58       不明字 44       2         C59       不明字 45       1         C60       不明字 46       7         C61       不明字 47       1         D1       丁子       1         D2       丁子花       5         D3       菊花文       4         D4       葉マーク       6         D5       草花マーク       1         D6       花マーク       2         D7       折花文       2         D8       桃マーク       1         D9       鷺       鷺         F3       甲子       1         F4       元亀年製       1         F5       元禄歳製       1         F6       享保壬寅       寛永通宝(十字)											1
C58       不明字 44       名         C59       不明字 45       1         C60       不明字 46       7         C61       不明字 47       1         D1       丁子       1         D2       丁子花       5         D3       菊花文       2         D4       葉マーク       6         D5       草花マーク       1         D6       花マーク       2         D7       折花文       2         D8       桃マーク       1         D9       鷺       1         F3       甲子       1         F4       元亀年製       1         F5       元禄歳製       1         F6       享保壬寅       1         G2       寛永通宝(十字)       1										ļ.	1
C59       不明字 45         C60       不明字 46         C61       不明字 47         D1       丁子         D2       丁子花         D3       菊花文         D4       葉マーク         D5       草花マーク         D6       花マーク         D7       折花文         D8       桃マーク         D9       鷺         F3       甲子         F4       元亀年製         F5       元禄歳製         F6       享保壬寅         62       寛永通宝(十字)											2
C60     不明字 46       C61     不明字 47       D1     丁子       D2     丁子花       D3     菊花文       D4     葉マーク       D5     草花マーク       D6     花マーク       D7     折花文       D8     桃マーク       D9     鷺       F3     甲子       F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)											1
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○											7
D1       丁子         D2       丁子花         D3       菊花文         D4       葉マーク         D5       草花マーク         D6       花マーク         D7       折花文         D8       桃マーク         D9       鷺         F3       甲子         F4       元亀年製         F5       元禄歳製         F6       享保壬寅         G2       寛永通宝(十字)											
D2       丁子花         D3       菊花文         D4       葉マーク         D5       草花マーク         D6       花マーク         D7       折花文         D8       桃マーク         D9       鷺         F3       甲子         F4       元亀年製         F5       元禄歳製         F6       享保壬寅         G2       寛永通宝(十字)											1
D3     菊花文       D4     葉マーク       D5     草花マーク       D6     花マーク       D7     折花文       D8     桃マーク       D9     鷺       F3     甲子       F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)											
D4     葉マーク       D5     草花マーク       D6     花マーク       D7     折花文       D8     桃マーク       D9     鷺       F3     甲子       F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)										1	
D5       草花マーク       1         D6       花マーク       2         D7       折花文       2         D8       桃マーク       1         D9       鷺       3         F3       甲子       1         F4       元亀年製       1         F5       元禄歳製       1         F6       享保壬寅       1         G2       寛永通宝(十字)       1										1	4
D6     花マーク       D7     折花文       D8     桃マーク       D9     鷺       F3     甲子       F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)										1	6
D7     折花文       D8     桃マーク       D9     F3       F4     甲子       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)											1
D8     桃マーク       D9     鷺       F3     甲子       F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)											2
D9     鷺       F3     甲子       F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)											2
F3     甲子       F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)											1
F4     元亀年製       F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)											3
F5     元禄歳製       F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)	F3									甲子	1
F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)	F4									元亀年製	1
F6     享保壬寅       G2     寛永通宝(十字)	F5									元禄歳製	1
G2 寛永通宝(十字) 1	F6										1
	G2									寛永通宝(十字)	1
uo	G3									鵬	1



グラフ1 1670 年代から 1730 年代における主要銘の量的推移

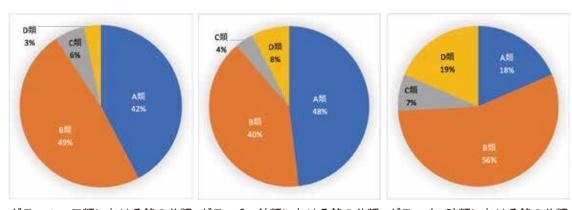
意図したものか誤用なのかはともかくとして、中国磁器に直接はないが中国磁器銘風の吉祥語の使用がみられる。特に B 9 は、肥前磁器では金襴手様式にしばしばみられる印象があるが、中国磁器での使用は僅かと考えられ、日本において流行した銘と考えられる。中国磁器に源流があっても中国よりも日本で定型化、定番化していく点は B 6 と同様である。

C類では、種類も使用件数も大幅に減少した。 $1670 \sim 1690$ 年代を特徴づける C49、C50、C53が 1700年代以降はほぼ消えていく。前代までのような肥前磁器独自の銘が減るが、C60のような印章形の銘が新たに登場してくる。

D類の登場は大きな画期といえる。裏面の文様が高台内にも施される事はあったが、高台内に独立した文様が標章的に描かれるのは17世紀末以降のことである。基本的には中国磁器、特に清朝磁器銘の影響が考えられるが、D1、D2等の肥前の独自銘もある。B類の増加、D類の出現を受けて銘全体の種類は増えているが、使用件数ではほぼA3とB6の二強であり、この2つが肥前磁器の定番銘として確立したと言える。

皿類、鉢類、碗類の3種類の器種毎の大分類の傾向をみていくと、皿類にはほぼ全ての銘があり、全体的な傾向をそのまま反映している。すなわち、A類、B類、C類でほぼ三分にして

いた状況から C 類が大幅に減少し、 $A \cdot B$  類で 90%を占める(グラフ 2)。鉢類も同様の傾向が認められるが、皿類との違いは B 類より A 類が、C 類より D 類が多いことである(グラフ 3)。 B 類より A 類が多いのは前述した A24 が鉢類へ最も多く使用されている状況が影響していると思われる。碗類は前稿と同様に事例が少ないが、ほぼ A 類だった状況から逆に半数以上を B 類が占めるようになる(グラフ 4)。しかしその内訳は B1 が 1 件、B 6 が 4 件、B 8 が 5 件、B12 が 1 件、B14 が 1 件、B15 が 3 件と意外にも B 6 の一強ではない。高台径の制約があるとはいえ A 類でも A 3 がみられず、定番以外が多いという特徴が指摘できる。



グラフ2 皿類における銘の分類 グラフ3 鉢類における銘の分類 グラフ4 碗類における銘の分類

	A 3	A 6	A17	A22	A23	A24	A27	A28	A30	B1	B 2	B 4	B 6	B 7	B 8	B 9	B10	B17
大皿	7	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	5	0	3	0	0	0
皿(輪花皿)	60 (21)	6 (1)	1 (0)	2 (0)	1 (0)	9 (4)	0	0	3 (0)	4 (1)	0	1	69 (20)	0	9 (2)	4 (0)	1 (0)	1 (1)
小皿(輪花小皿)	13 (7)	5(1)	5(1)	0	0	5 (0)	1 (1)	1 (0)	1 (0)	1(1)	0	0	42 (24)	0	9 (0)	1 (0)	0	0
手塩皿	2	0	15	0	1	0	0	1	0	0	1	0	5	1	1	0	0	0

表 2 皿類における各銘の使用件数

			050	050	055	050	057	050							
	C 1	C49	C50	C53	C55	C56	C57	C59	C60	C61	D2	D3	D4	D8	D9
大皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
皿(輪花皿)	1 (1)	3 (1)	2 (1)	1 (0)	1 (0)	0	0	0	3 (1)	1 (0)	2 (1)	2	3 (1)	0	3 (0)
小皿(輪花小皿)	1 (1)	1 (1)	1 (0)	0	0	0	1 (0)	1 (0)	2 (0)	0	0	0	0	1 (0)	0
手塩皿	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

次に皿類の細分類における A ~ D 類銘の使用件数について表 2 にまとめた。皿類の細分類については 30 cm以上を大皿、30 cm未満を皿、16 cm未満を小皿、11 cm未満を手塩皿とする。皿・小皿については口縁が花弁状をなすいわゆる「輪花皿」も抽出している。

大皿では C・D 類がなく、種類が限られる中 A 3 が最も多い。皿では A 3、B 6 がその他の 銘より圧倒的に多い。この 2 種類では B 6 が若干多いものの、輪花皿の件数をみても 1 件の差 であるので、使用頻度としては同程度だろう。一方小皿をみると B 6 が抜けて多く、A 3 がそれに続いている。ただ使用される銘の種類では A 類の方が多い。手塩皿では A17 が一番多く、

次にB6だが、C類はC56が1件のみでD類はない。大皿、手塩皿といったサイズの大きいもの、 小さいものにはA類が使用される頻度が高いことが言える。B6は総数自体が多い皿、小皿で 圧倒的多数ではあるものの、鉢類や碗類を含めその他の器種では目立つ程はない。

#### 4. まとめ

柴田夫妻コレクションを対象に17世紀末から18世紀前半の銘の集成、分類を行った。対象範囲の資料数として949件の作品があり、このうち465件に52種類の銘が確認できた。分類した銘のうち数としてはB6が最も多く、種類もB類が最も多様となる。前代から見込の五弁花文や裏文様などにみられた画一化やパターン化が進み、銘においてもA3、B6が肥前磁器の定番銘になったと言える。一方、中国磁器の輸出の再開や中国の色絵磁器をモデルとした金襴手様式の成立など、中国志向の高まりから清朝磁器にみられる吉祥語銘やマークを肥前磁器が取り入れるようになり、銘の種類は増加した。銘と器種の関係では、主に次のことが指摘できた。

- ・A17 が手塩皿に多い。
- A24 が鉢に多い。
- ・B6は皿と小皿に特に多いが、その他では目立つ程の量はない。
- ・B6が皿と小皿に多いが、より大きい大皿、より小さい手塩皿にはA類の使用が目立つこと。
- ・C58 は器種、文様共に共通性がみられる。
- D 6 のうち赤の色絵線描きのものは輸出向けの製品にみられること。

ただし C58、D 6 については事例が少ないため、より多くのデータの集積と検証が必要である。 引き続き柴田夫妻コレクションにおける銘の集成と分類を行うことで基礎資料の作成に努め たい。

#### 引用 • 参考文献

有田町史編集委員会 1988『有田町史 古窯編』有田町

大橋康二 1988a 「17 世紀後半における肥前磁器の銘款について」『東洋陶磁』第 17 号 pp. 25 ~ 37 東洋陶磁学会

大橋康二 1988b 「18 世紀における肥前磁器の銘款について」『青山考古』第 6 号 p. 67  $\sim$  74 青山考古 学会

大橋康二 1990「柿右衛門古窯と17 世紀後半の銘款」『古伊万里シリーズ I 盛期伊万里の美』pp. 94 ~ 99 古伊万里刊行会

大橋康二 1991 「肥前磁器の変遷 - 文様を中心として -」『寄贈記念柴田コレクションⅡ』 pp. 87 ~ 95 佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二 2001 「肥前・有田磁器にみる紀年銘について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第89集下巻 pp. 685 ~ 714 国立歴史民俗博物館

大橋康二 2014 「コーツ・コレクション」『John Coates COLLECTION』pp. 341 ~ 343 Rebekah Clements, John Coates

大橋康二 2016 「柿右衛門様式後の柿右衛門窯系色絵磁器の推定試案」『亀井明徳氏追悼・貿易陶磁研 究等論文集』pp. 86 ~ 96 亀井明徳さん追悼文集刊行会

耿寶昌 1984『明清瓷器鑒定 清代部分』學苑文化事業出版

佐賀県立九州陶磁文化館 1997『寄贈記念柴田コレクションV 延宝様式の成立と展開』

佐賀県立九州陶磁文化館 1999『柿右衛門様式総合調査事業報告書』

佐賀県立九州陶磁文化館 2008『古伊万里の見方 シリーズ 5 形と用途』

佐賀県立九州陶磁文化館 2012『古伊万里の文様集成』

佐賀県立九州陶磁文化館 2019『柴田夫妻コレクション総目録(増補改訂)』

鈴田由紀夫 1995「17世紀末から 19世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクション展 (IV)』 p. 272  $\sim$  279 佐賀県立九州陶磁文化館

朱裕平 2018『中国古瓷銘文』上海科学技术出版社

童依華 1984『中國歴代陶瓷款識彙集』大業公司

冨永樹之 1998「出土品に見る景徳鎮青花の底裏銘」『青山考古』第 15 号 pp. 35 ~ 65 青山考古学会中島浩気 1955『肥前陶磁史』肥前陶磁史刊行会

早坂優子 2000『日本・中国の文様事典』株式会社視覚デザイン研究所

水町和三郎 1957「柿右衛門の製品」『柿右衛門』pp.65 ~ 150 金華堂

水町和三郎 1959「古伊万里の製品」『古伊萬里』p. 89 ~ 146 古伊萬里調査委員会

宮木貴史 2020「柴澤コレクションにみる肥前磁器の銘款について」『開館 40 周年記念・寄贈記念 特別企画展 柴澤コレクション』pp. 117 ~ 130 佐賀県立九州陶磁文化館

宮木貴史 2021 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 1」 『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』 第 6 号 pp. 30  $\sim$  51 佐賀県立九州陶磁文化館

宮木貴史 2022 「柴田夫妻コレクションにみる銘款集成 2」『佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要』第7号 pp. 68 ~ 85 佐賀県立九州陶磁文化館

村上伸之 1999 「肥前における明・清磁器の影響」『貿易陶磁研究』第 19 号 p. 65 ~ 84 日本貿易陶磁研究。 研究会

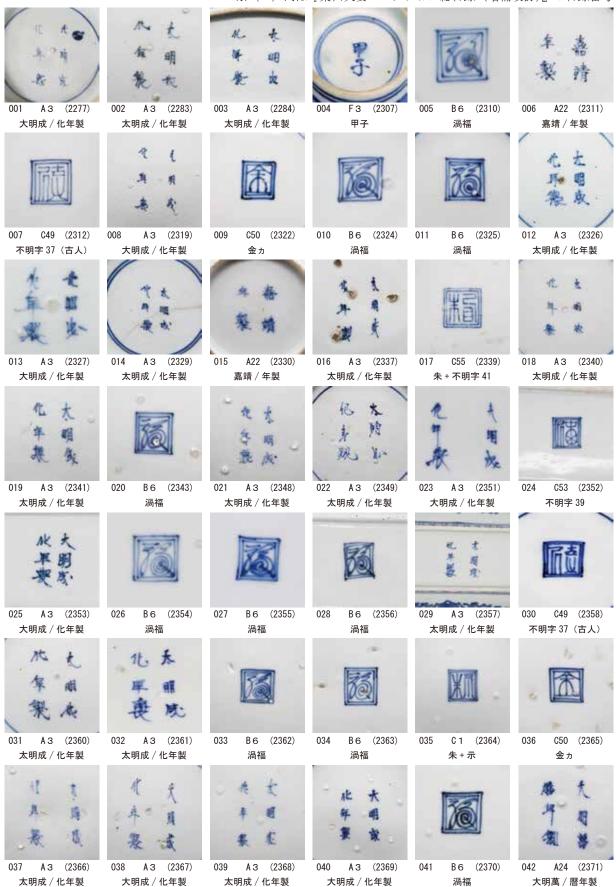
Rebekah Clements & John Coates 2014 [John Coates COLLECTION]

Rebekah Clements & John Coates 2019 [John Coates' COLLECTION THIRD EDITION]

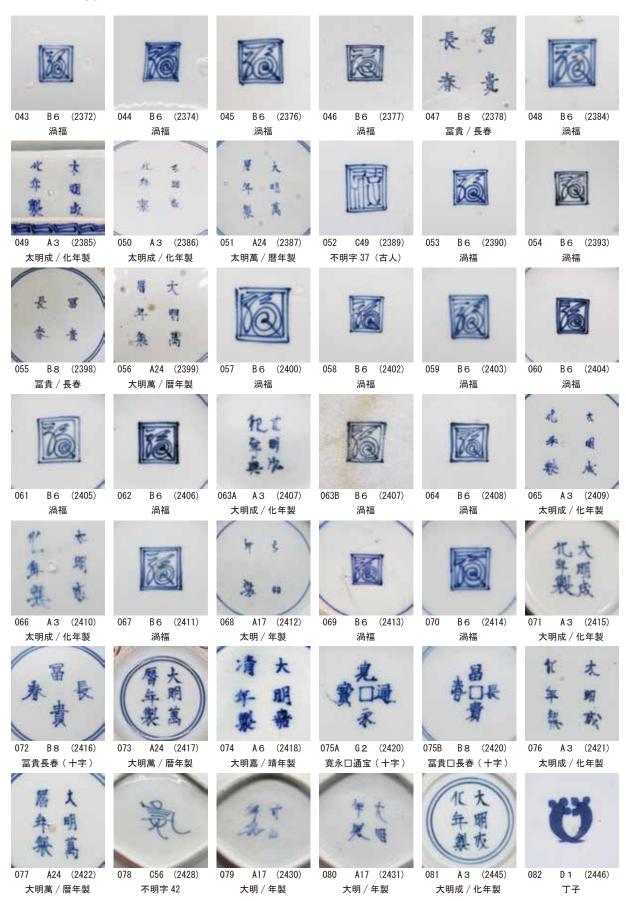
#### 柴田夫妻コレクション肥前陶磁器銘一覧③

#### 1680 ~ 1710 年代

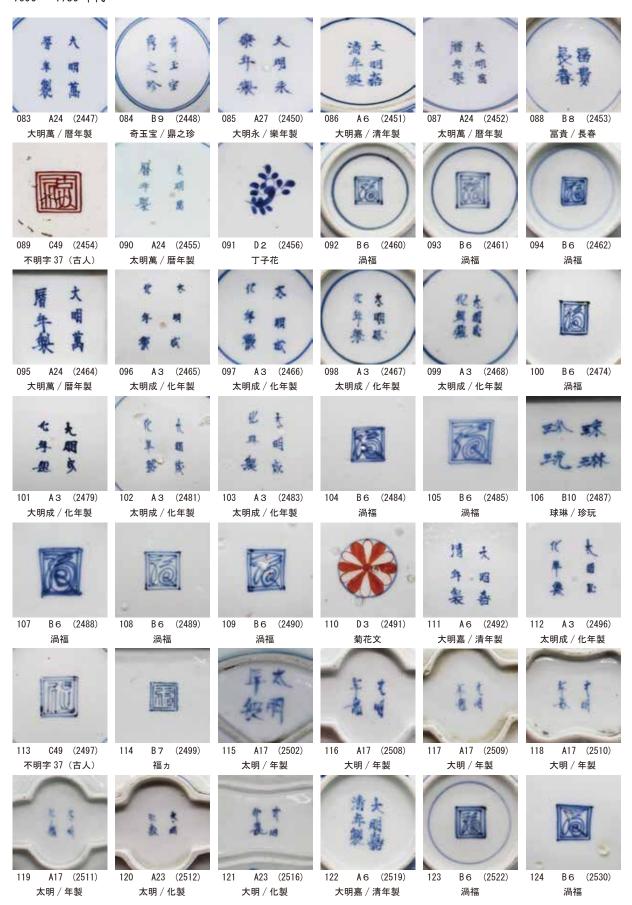
※( )内は『柴田夫妻コレクション総目録(増補改訂)』の目録番号



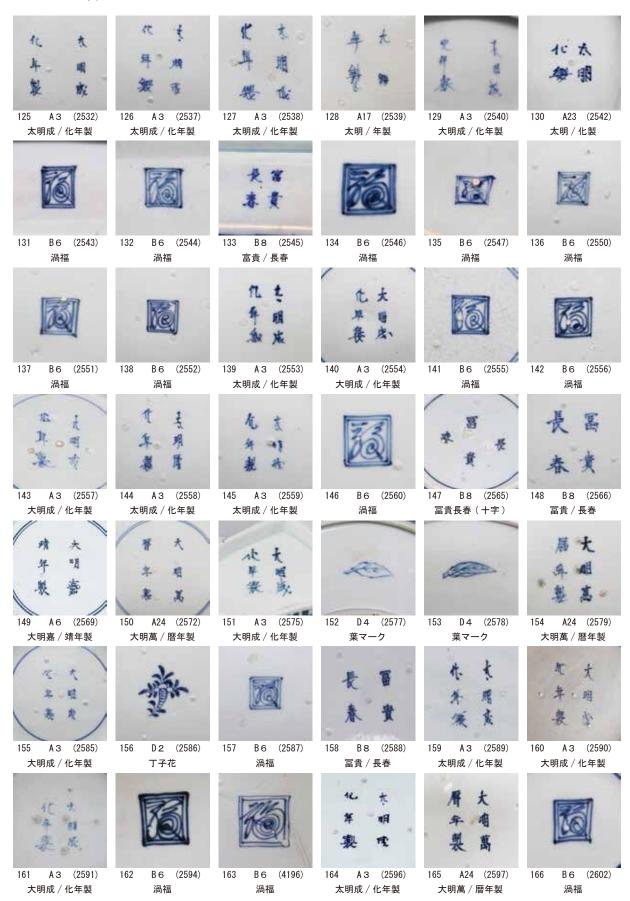
#### 1690~1710年代



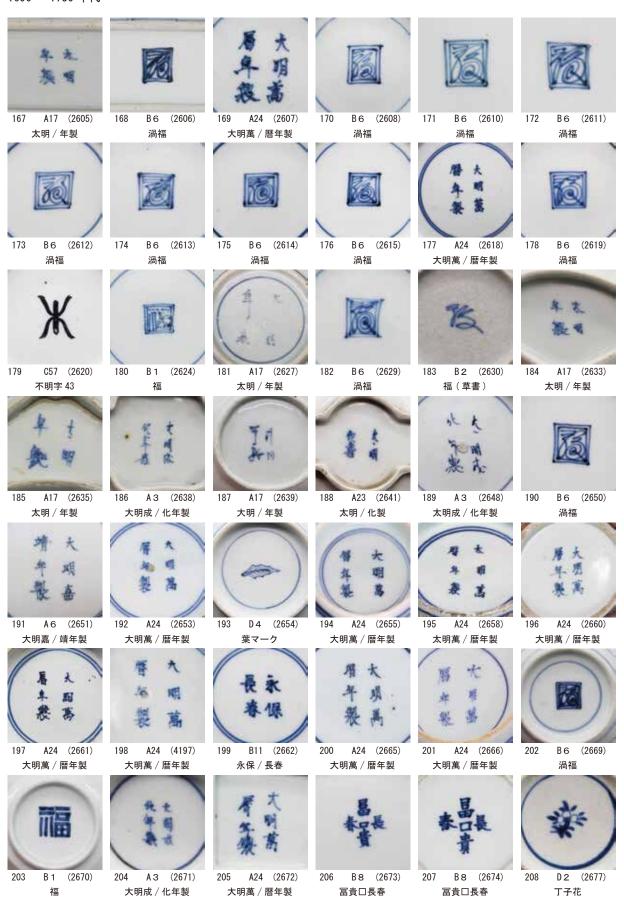
#### 1690 ~ 1730 年代



#### 1690~1730年代



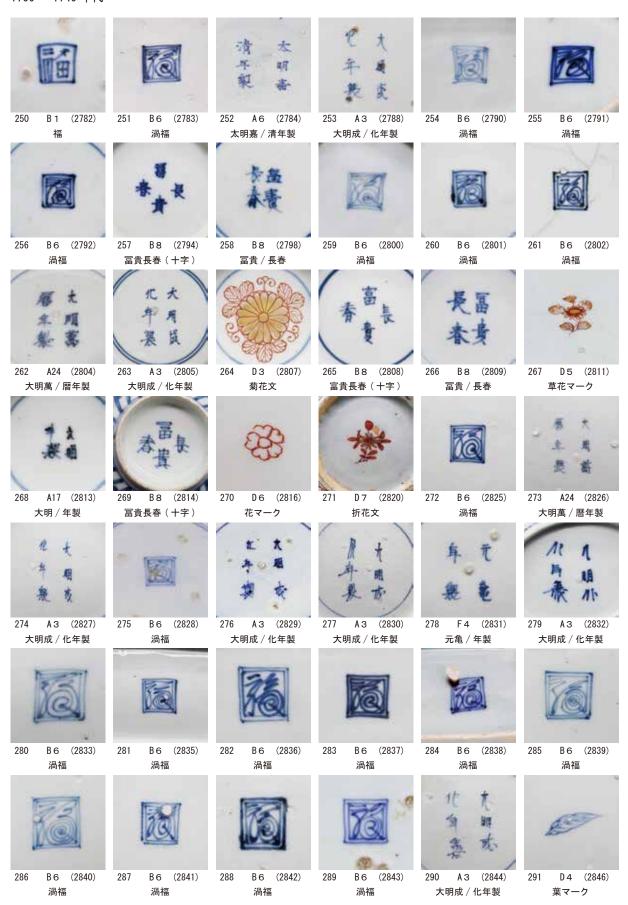
#### 1690 ~ 1730 年代



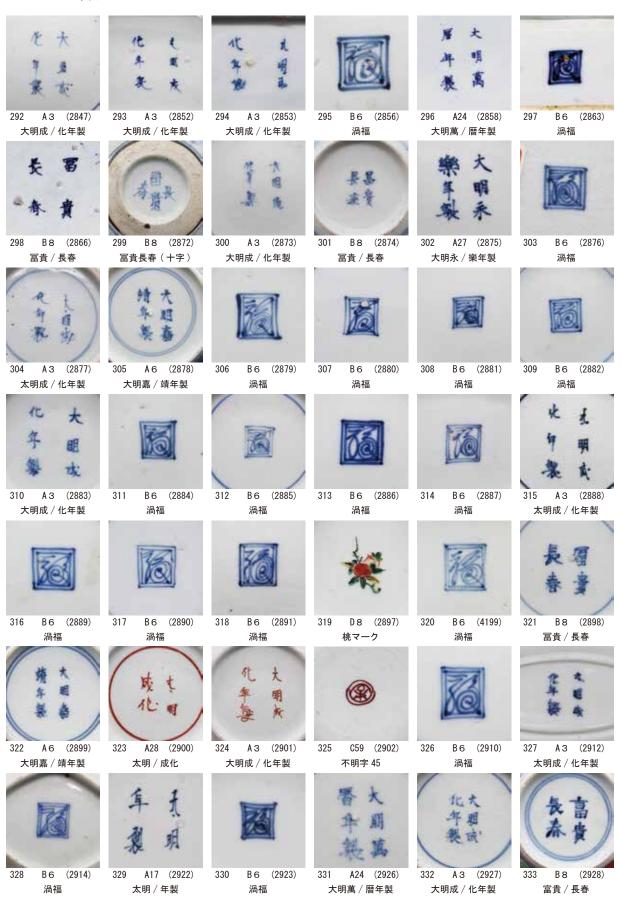
#### 1690 ~ 1730 年代



#### 1700 ~ 1740 年代



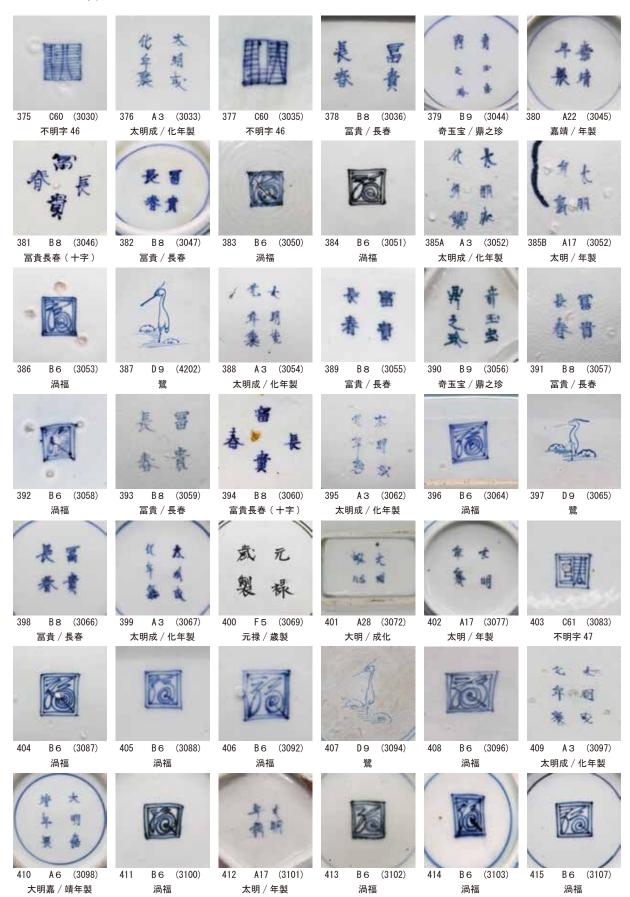
#### 1700 ~ 1740 年代



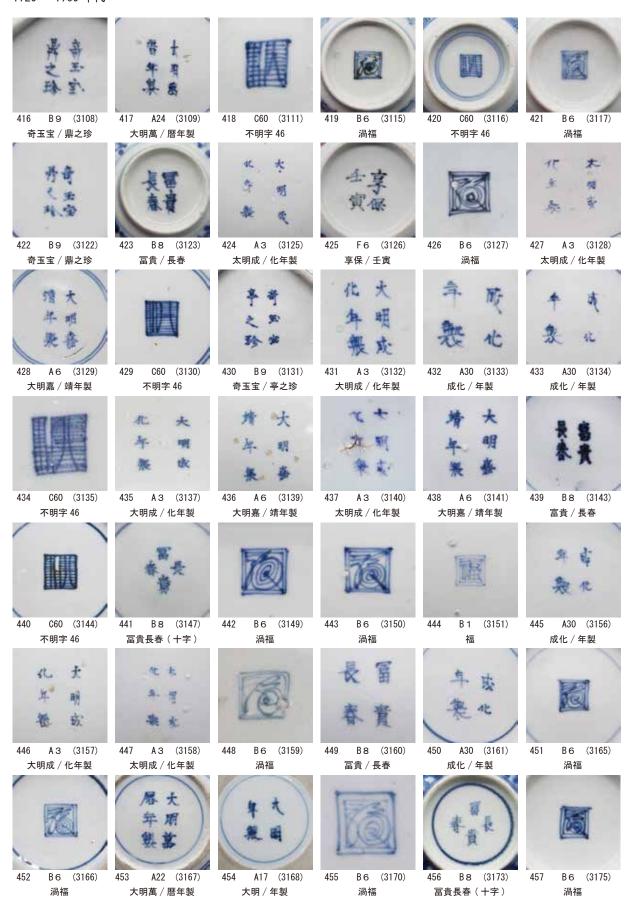
#### 1700 ~ 1740 年代



#### 1710~1760年代



#### 1720 ~ 1760 年代



### 1730 ~ 1770 年代



## 執 筆 者 (掲載順)

大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館 名誉顧問)

德永貞紹(佐賀県立九州陶磁文化館 副館長)

宮木貴史(佐賀県立九州陶磁文化館 学芸員)

# 佐賀県立九州陶磁文化館 研究紀要 第8号

令和 5 年 (2023 年) 3 月 24 日 編集発行 佐賀県立九州陶磁文化館 〒 844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙 3100-1

印 刷 株式会社 三光 〒 848-0022 佐賀県伊万里市大坪町乙 4161-1

# BULLETIN

# OF

### KYUSHU CERAMIC MUSEUM

No.8

#### CONTENTS

Contents

Characteristics of Japanese Ceramics in the Oliver Smith Collection

· · · · · · · · · · OHASHI Koji

Fundamental Study on the Matsugatani Ware from Ogi in the Hizen Region

· · · · · TOKUNAGA Sadatsugu

Meikan Markings in the Mr. and Mrs. Shibata Collection Part.3:

Style of the Genroku Period

· · · · · · MIYAKI Takafumi

2023